

# 市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.112

2009/2/1



発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL:03-3423-0185 FAX:03-3402-3218

郵便振替：00120-9-359506 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp ホームページ：http://www.1.jca.apc.org/iken30

\* 隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円 グリーン会員の方は年1000円

渡辺武は帝国美校時代、前衛グループのリーダー格だった。人望厚く、後輩たちから慕われ、いろんな相談をもちかけられた。

芸術のこと、恋愛のこと、家族のこと……しかし、話が戦争におよぶと武は口ごもった。

やがて応召し、沖繩に発つて数ヵ月後、

「嵐の日が間近になる様な予感がする。自分の作品をできるだけ散らさないように」

死を予期したのか、妻あてにそんな手紙がとまった。

残った絵の具をぜんぶ使い果たしてから死にたい、というのが武のログセだったのに。



渡辺 武「人々」

(無言館所蔵 作者の経歴は3ページ)

(窪島誠一郎『無言館を訪ねて 戦没画学生「祈りの絵」第Ⅱ集』講談社刊より)

## 「市民の意見」112号 目次

### 緊急特集 ガザ

ガザ、そこから今、人間としてのモラルを問う声が  
発せられている 清末愛砂 4

私たちに残された最後のものを守るために

イスラエル政府への抗議と要求 サファ・ジューデー 6

市民の意見30の会・東京 8

### 占領、兵士、難民

ソニミ事件と『服従の心理』 吉川勇一 10

日々悪化する難民生活 高遠菜穂子 12

37年目の『冬の兵士』 田保寿一 15

### 運動の現場から

重慶大爆撃裁判 三角忠 22

さまざまな講演会に参加して 意見広告運動事務局 24

### 田母神論文に関連して

超憲法的重武装集団としての自衛隊 井上澄夫 26

### 海外派兵問題

海賊対策で海外派兵なんて 編集部 20

### 私の戦争体験(投稿)

戦争の思い出 田中翠 32

### 文化

詩「うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！」

回り回って 連載エッセイ⑨ 井上俊夫 2

「差別」を表現する 鈴木一誌 17

マンガ「ふしぎの国のありか」 まつだたえこ 18

本の紹介『戦争サービス業』 高橋武智 28

映画紹介『シリアの花嫁』 本野義雄 30

### その他

読者懇談会 インフォメーション 9

読者のおたより 事務局だより 33

無言館ツアーのお知らせ 編集後記/会計報告 35

◆本号のすべてのカット 吉岡セイ 36

◆題字 安西賢誠 31

### ☆2月の緊急学習会のご案内☆

講師：早尾貴紀さん「ガザ侵攻ーイスラエルはなぜガザを攻撃したのかー」

日時：2009年2月5日(木) 午後6時半 参加費500円/場所：たんぽぽ舎(JR水道橋駅5分 ダイナミックビル5F)

電話：03-3238-9035 地図ウェブ：http://www.tanpoposya.net/info/map.htm (地図はP29参照)

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

### 井上俊夫

昔の軍隊はいやなところだったという話をするとかささず、嘘だ嘘だと若々しい男の声が跳ね返ってくる。

あんたがた元日本軍兵士は

新兵の頃はそうだったかもしれんが

三年兵、四年兵ともなれば

夜毎夜毎、下級の者に陰湿なリンチを加える喜びに

五体を震わせていたというじゃないか

俺たちもたった一度でいいから

堪能するまで人を苛める楽しみを味わってみたい

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

命令で異国の戦場へ引っぱり出されるのは

大変気が重かったという話をするとかささず、嘘だ嘘だと若々しい男の声が跳ね返ってくる。

あんたがたは与えられた新品の三八式歩兵銃を

後生大事に抱きしめながら

いのちがけの無銭旅行もまた楽し

むこうへ行けば毛色の違った女を抱けるかもと

期待に胸はずませながら

輸送船に揺られていたというじゃないか

俺たちもたった一度でいいから

日の丸の旗をはためかして殺人ツアーに出かけてみたい

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

戦争で無益な殺生をしたくなかったという話をするとかささず、嘘だ嘘だと若々しい男の声が跳ね返ってくる。

あんたがたは殺さなくともいい市民や捕虜の首をはねたり

銃剣で突き刺したり

生き埋めにしたりして

けっこう虐殺を楽しんでいたというじゃないか

俺たちもたった一度でいいから

思う存分人間を殺してみたい

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

占領地の非戦闘員は大事にしたという話をするとかささず、嘘だ嘘だと若々しい男の声が跳ね返ってくる。

あんたがたは若い女とみれば見境もなく強姦し

あとで悶着が起きないようにと

必ず女の胸に一発銃弾をぶちこんでいた

母を求めて泣き叫ぶ幼い子供だって

容赦しなかったというじゃないか

俺たちもたった一度でいいから

異国の女を犯してみたい

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

市民の意見 NO.112 2009/2/1

戦争だけはやってはならない

今度戦争が起こつたら世も末だという話をする  
すかさず、よけいなお世話だと

若々しい男の声が跳ね返ってくる。

俺たちが死のうと生きようとほっといてくれ  
あんたがた年寄りがおためごかしに口にする

反戦平和論議なんかちゃんちゃらおかしい

そんなに戦争が嫌いなら

なぜ若い時に命を賭して反対しなかった

なぜ戦争に行ったのだ

なぜ人殺しをやったのだ

そもそもあんたがたに戦争に反対する資格があるのかよ  
とにかく俺たちもたった一度でいいから

戦争というべらぼうに面白そうなものをやってみたい

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

詩集『八十六歳の戦争論』（かもがわ出版）より



## ▼ 詩の作者について ▲

いのうえ・としお

(1922～2008)

大阪府寝屋川市生まれ。42年に徴兵され、中国で飛行師団の気象部隊に所属。戦後、中国の捕虜収容所で1年過ごし復員。57年、詩集「野にかかる虹」でH氏賞、農民詩人と評される。詩集「従軍慰安婦だったあなたへ」、エッセー「わが淀川」など。著書「八十歳の戦争論」では、軍隊生活について赤裸々につづった。06年、日本現代詩人会の先達詩人に選ばれた。

## ▼ 表紙絵の作者 ▲



渡辺 武

(わたなべ・たけし)

1916年（大正5年）11月3日、埼玉県北葛飾郡桜田村字上川崎で農家の長男として生まれる。1937年（昭和12年）、帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）師範科卒業後、P. C. L.（現・東宝映画）美術部に勤務し、結婚。1938年（昭和13年）帝美最後の前衛グループ「ジュンヌ・オム」結成に参加、独立美術協会出品。1941年（昭和16年）、「青年美術家団体」を結成。1942年（昭和17年）美術文化協会参加。同年、応召。1943年（昭和18年）、沖縄・首里にて戦病死。享年二十七歳。

## ガザ

昨年12月27日から一方的に攻撃され続けた「ガザ」。空爆から22日後の1月18日、イスラエルは一方的に停戦を宣言。しかし数時間後、ハマスのロケット砲を理由に再び空爆を開始する。パレスチナほど「不条理」という言葉があてはまる場所はない。ミサイルの攻撃を受けて死んだ多くの子どもたちに死ななければならぬ理由があるとしたら、それは彼らが「パレスチナ人」だからか……

## ガザ、そこから今、人間としてのモラルを問う声が発せられている

清末 愛砂

私は、過去に一度だけ空爆を自分の目で、

確認したことがある。イスラエルの占領下

にあるパレスチナのヨルダン川西岸地区の

バラータ難民キャンプに滞在していたとき

のことだ。軍用ヘリコプターから放たれる

赤い光線が窓から外を見ていた私の視界の

なかに入ってきた。時間がどれほどのもの

であったのか、どうしても思い出せないが、

おそらくほんの数分の短いものであったは

ずだ。それが空からの攻撃であることに気が

がつくまで私は少しだけ時間を要した。人

生でそのようなものを目にしたことがな

かった私には、それが本やニュースなどで

「空爆」と呼ばれているものであることを

なかなか認識できなかったからである。ほ

どなくして「空爆」という言葉が頭のなか

をよぎったとき、私がいる難民キャンプが

そのときのターゲットにはなっていないよ

うだ、ということを理解しつつも、激しい

恐怖心がわきあがってくるのを抑えること

ができなかった。空爆が人の命を容易く奪うものであることくらい、私でも分かっていたからだ。

2008年12月27日、ガザ地区にイスラエル軍の戦闘機が空爆を開始した。イスラエルは、侵攻の目的をガザから周辺のイスラエルの街に対して行なわれていたハマースによるロケット弾攻撃を阻止することにあると主張した。しかし、それはあまりにも見え透いた嘘だった。パレスチナに関わり始めて8年、私はイスラエルの同じ「言い訳」を聞き続けてきた。占領国が自分たちを被害者呼ばわりし、占領下に置いている人々を「テロリスト」と称して攻撃する。いつものことだ。イスラエルがロケット弾攻撃を本当に問題であると感じているなら、なぜ占領をやめないのか。なぜ、封鎖をやめないのか。なぜ、ハマースと対話をしないのか。

外国人ジャーナリストがガザに入ること



をイスラエルが許可していないため、空爆開始後すぐには、その様子がガザの外に住む人びとにはなかなか伝えられなかった。そのうち、ガザ在住のパレスチナ人ジャーナリストや住民たちが無差別になされる攻撃に晒されながらも、死にものぐるいで撮影した写真や動画をインターネットを使って可能ながぎり、流し始めた。また、アルジャジーラ（カタールに本社を置くアラブ系の衛星放送）やBBC（英国放送協会）など大手のメディアで働くガザ在住のパレスチナ人の特派員の絶え間ない努力を通して、少しずつ、少しずつ、その様子が外に伝わるようになった。これらのジャーナリストや住民たちは、自分たちの生活空間であるガザが、圧倒的な力を誇る占領者による破壊の最中にあることを記録し、ガザの外に出し、世界に示そうとしたのだ。

それらの映像を通してみる空爆は、私





の脳裏のなかに残る赤い閃光とは規模がまったく異なるものだった。耳を劈(つんざ)くような轟音がすると、巨大な煙がもくもくとあがる。そして、次の轟音、次の轟音、次の……。電気がほとんどまわってしまったガザで、発電機を使いながらパソコンを動かし、インターネット経由で現地情報を伝えるジャーナリストや市民の手記には、わずか365平方キロほどの面積しかない小さなガザに、イスラエルの戦闘機によるミサイルの雨が降り注がれている様子が、その下にいる者の視点から描かれている。生身の人間の身体にミサイルを落されている者の恐怖心、怒り、流れ出る血と涙、そして正義を求める声。

ガザは、猫の額ほどの土地に約150万人が住んでいることから推測できるように、世界で最も人口密度が高いといわれている。そこにミサイルの一つでも落とされたら、その下でどれほど多くの人びとが犠牲になるか、想像に難くない。負傷者を病院に搬送する必要があっても、燃料

がなければ救急車は走らない。砲撃下をかくぐって病院にたどりついて、イスラエルによって一年以上の封鎖を強いられしてきたガザの病院に残されている医療品は極めて限られている。シファア病院でボランティア医師をしているノルウェー人医師によると、その残り少ない医療品も底が尽きようとしている。透析なしには生きることができない患者はどうするのか。難産が予想される妊娠女性は、どこで産めばいいのか。

軍事攻撃開始から9日目の2009年1月4日空爆数が800回を超えた。さらには、同日、ガザ住民がおそらく最も恐れていたことが起きた。イスラエル軍がついに地上戦を始めたのである。戦車がガザのなかに続々と入っていく。なんてことだ。今までに破壊された建物には、ガザ・イスラーム大学、モスク、一般住居、子どもたちの遊び場などが含まれている。1月6日には、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)が運営する学校のうち3カ所が砲撃された。これらの学校は封鎖状態にあるガザで、戦火を逃れる術をもたない住民たちが、生き残りをかけて避難していた場所だった。数百人の避難民のうち、瞬く間に46人が殺され、多数の人々が負傷した。信じがたい事態である。

ガザ人口の68%は、1948年のイスラエルの建国の前後で故郷を追放された難民

である。これらの難民たちは故郷への帰還を待ち望みながら、イスラエルの苛酷な占領下で生きてきた。今回の攻撃にいたるまで、ガザ住民は繰り返し、繰り返し軍事侵攻を受け、破壊と虐殺を経験してきた。土地や家を奪われ、難民となった人びとが何度も家を失うということ。それは、避難先すら「避難先」とならなかったことを意味している。「野外監獄」と揶揄される封鎖下のガザで、今、これらの難民たちは再びイスラエル軍の包囲下におかれ、信じがたい規模の軍事攻撃を受けている。これは現在進行形のパレスチナ人に対するエスニック・クレンジング(民族浄化)にほかならない。追放と虐殺のパレスチナの歴史に、また一つ虐殺の記憶が加えられたのだ。

この原稿を書いている現在もイスラエル軍による爆撃は続き、地上戦はガザ市の中心部に移りつつある。パレスチナ人の死者数は900人を、負傷者数も4000人を超えた(7頁の注参照)。誰かイスラエル軍の暴挙を止めてくれ。ガザの人びとはそう叫んでいるはずだ。なぜ、被害者が被害を受け続けなければならないのか。世界はなぜ我々を見殺しにするのか。自分たちの死に無関心でいいでくれ。我々は生きている人間だ。そう、ガザから、今、人間としてのモラルを問う声が発せられている。ガザの外に住む(私たち)に向けて。

(きよすえ・あいさ、島根大学教員)

# 私たちに残された最後のものを守るために

サファ・ジュデー

## 街が瓦礫に変わった

1月3日の夜、私たちは悟った。イスラエルの戦争大臣エフド・バラクの言葉に正しいと言えるものがあるとしたら、それは唯一、この侵攻が長いものになるということだ。こちらの時間で午後9時15分、イスラエル軍は3つの地点からガザ地区に入ってきた。F-16が上空から掩護(えんご)する中、ガザ市の東、そして、北部のジャバリアとベイト・ラヒヤから、パレスチナの人々が住む地域に戦車隊が進軍してきた。同じ時刻に、ガザ最南端のラファにも、東南から戦車と歩兵部隊が侵入した。ガザ市のミントル地区には戦車砲と大砲の砲弾が雨あられと襲いかかり、海からもガザ市に向かって戦艦からの一斉砲撃が起こった。ガザ地区全域が包囲され、ミサイルと大砲の猛烈な攻撃が続いた。

多くの住人は、地上侵攻が始まったことさえ気づかず、その間ずっと、イスラエル軍の空爆が激しさを増しただけだと思っていた。ガザ市はこの数日間、停電が続いていて、どの家のラジオも電池が切れかかっていたのだ。すでに1週間以上、ガザ市のほぼ全住民が家に閉じ込められた状態で過

ごし、開いている店など1軒もない。ニュースは口伝で伝わってくる話に頼るしかなく、自家発電装置を持っていて、なおかつ燃料が残っているという幸運な人はごくごくわずかしかない。このうえなく厳しい、絶望的な状況に置かれたこの今、武器など持っていない一般の人たちに猛烈な爆撃が浴びせられている。

地上戦に先立つ8日間、イスラエル軍は、完全に無防備な人びと(その4分の3は女性と子どもだ)相手に、世界で最も進んだ軍事力をシステマティックに、思う存分ふるいつづけた。気力・体力とも限界に達した状態で、住民たちは、途方もない喪失感と焦燥感にさいなまれながら必死に耐えている。言うまでもなく、18カ月に及ぶ封鎖で、ガザはすでに、これ以上持ちこたえるのもほとんど不可能な状態に追い込まれていた。この数日間で、私たちは10以上のモスク、聖なる礼拝の場所が爆撃を受けるのをまのあたりにした。ほとんどが、中で人びとが祈りを捧げている時のことだった。私たちは、瓦礫の下から子どもたちが引きずり出されるのをまのあたりにした。その小さな体の中で折れていない骨はただの1本もないように見えた。私たちは、血まみれの死

体と最後の息を引き取る人たちであふれかえっている病院をまのあたりにした。空爆を受けた現場で懸命の蘇生処置を受けている友人たちの姿をTVで見た。何家族もの家族全員がミサイルの一撃で地面もろとも吹き飛ばされるのを見た。私たちの街が、家が、近隣の地域一帯が、とてつもない破壊行為によって、何だったのかもわからない瓦礫の山に変じていくのをまのあたりにしてきた。

## 私たちはひとつ

これだけのことをやっておきながら、イスラエルは声高に、この攻撃は民間人を対象にしたものではない、これはハマースの政治・軍事部門に対する戦争であると強固に言いづづけている。一方の私たち、ガザの住民は、全員が、およそ人間に耐えられようはずもない恐怖と暴力を一身に受けつづけている。もしかしたら、イスラエル軍は、自分たちが作り出した妄想を真実だと思いつくようになり、その妄想のもとに行動しているのではないか。そんな思いすら浮かびはじめています。イスラエルは私たちの家に入り込み、私たちの街で私たちを攻撃し、私たちに向けて全開の暴虐さを発揮しつづけている。いったい、私たちは、どう対応するのが当然だと思われるのか？

今、ガザでは、パレスチナのすべての派

が一致団結し、持てる限りの戦闘能力を結集して、敵に立ち向かっている。その戦闘能力は、イスラエルの軍事力に比べられるようなものでは到底ない。それでも、彼らの闘いは、私たちに、かつてないほど強く、パレスチナの人びとは自分たちのものを守るために最後の最後まで闘うだろうという確信を与えてくれている。抵抗と勇気と愛がパレスチナ人のアイデンティティにとって不可欠のものだということを、それは、私たちが耐えている苦難がどれほどのものであると、決して変わることはないのだということを、示してくれている。

彼らの闘いは私たちの心に力を与えてくれた。私たちが最も必要とする時に、心を支えてくれるものが出現したのだ。パレスチナ解放人民戦線（PFLP）のアブー・アリー・ムスタファ旅団、イスラーム聖戦運動のアル・クドウス旅団、ハマースのイッズディーン・アル・カッサム旅団、民衆抵抗委員会（PRC）のサラフツディーン旅団、ファタハのアル・アクサ殉教者旅団、このすべてが結束し、統合されたひとつの最前線部隊として、100パーセントの危険が約束されている中、私たちの街を、私たちの家を守るために闘っている。彼らはみな、みずからの死が無力な子ども死をひとつでも阻むことができるのなら、それなら自分は死んでもかまわないという覚悟ができています。私たちはひとつだ。私た

ちはこれまで繰り返し繰り返し苛酷な運命を受け入れてきた。しかし、ガザの人たち（その80%は難民だ）は決して皆殺しにされるつもりはない。圧政と強欲に導かれるままによそからやってきた連中に、今一度この地から追い立てられるつもりはない。

パレスチナ各派の統一レジスタンス部隊の人員が全部でどれくらいになるのか、いろいろな数字が出されているが、おそらくは数千というところだろう。一方、ガザ地区内・ガザ周囲にいるイスラエル軍は、現時点でおよそ3万3000。明日中には、さらに多くの予備役兵が召集されることになっている。圧倒的な軍事力の差は地上部隊の人員数にとどまらない。イスラエル陸軍はイスラエル海軍とイスラエル空軍に掩護されている。地上部隊には大砲があり、戦車があり、工兵隊があり、諜報機関のサポートがある。イスラエル兵は最新鋭の武器と情報機器を装備している。

一方のパレスチナの戦闘員はと言うと、イスラエルの軍事力に抗して自分自身とガザの人々を守るのに、手作りのロケット砲と最少限・最低レベルの武器で間に合わせなければならぬのだ。

### ガザは私たちの最後の家

この今、攻撃のただ中であつては、現在の状況を正しく判断することも今後を予測するのも難しい。死んだ人、怪我をした人

の数も、私たちが失ったものがどのくらいなのか把握するのが困難になっている。食べ物や水や暖かさや陽の光といった、生きていくための最低限の必需品が贅沢なものではなかったのがいつのことだったのか、それを思い出すのさえ難しい。今、この時点で機能しているのは、人間としての最低限の本能だけ。

愛するものを守りたいという欲求、シエルターを確保したいという欲求、闘う本能、逃げようとする本能。私たちはもう長い間、逃げつづけてきた。ガザは私たちの最後の避難所、今イスラエルと呼ばれているものに取って代わられてしまったのちの、私たちの最後の家だ。このすべてが60年前に起こった。イスラエルは、これ以上、いったい何がほしいというのか。私たちにはもうどこにも行くところはない。イスラエルは、現在ある国際法の条項をことごとく無視してきた。今こそ、私たち自身を守る時、レジスタンスの時だ。

・・・2009年1月5日  
（ガザ在住、ジャーナリスト）  
エレクトロニック・インティファダー／Live from Palestineより転載（翻訳 山田和子）

注 1月19日現在の死者数1300人以上。うち女性が104人、子どもが41人。

# イスラエル政府への抗議と要求

市民の意見 30 の会・東京

2009 年 1 月 13 日

私たち、市民の意見 30 の会・東京は、昨年 12 月 27 日から強行されているイスラエル政府によるパレスチナ自治区ガザの市民に対する攻撃に強い怒りをもって抗議する。

1948 年、国連決議により領土を分割してからもイスラエル政府は「パレスチナが存在する限りイスラエル国家は樹立できない」と強弁して領土拡大を行ない、1967 年の第 3 次中東戦争でガザを軍事占領。以来、ガザではイスラエルによる暗殺攻撃や侵攻が繰り返し行われてきた。2008 年からは、さらに食料、燃料の搬入が厳しく制限され、医薬品の持ち込みどころか病人の搬送さえできず、蔓延する貧困のなかで 150 万人のパレスチナ人が高いコンクリート壁に囲まれたこの狭い区域に閉じ込められ、いま連日、空・海・陸からの圧倒的な軍勢力による攻撃にさらされている。この事態は、「ナクバ(大破局)」の繰り返しであり、イスラエル政府自身が「ショアー(ホロコースト)」を再現していることではないのか。

こうしたなかで、イスラエル政府は、これまでガザに対する攻撃はハマスのロケット砲攻撃に反撃する自衛権の行使であると主張してきたが、しかし連日行なわれている空爆、艦砲射撃、砲撃は、とうてい自衛権を口実に正当化できるものではない。これは 1948 年のイスラエル建国以来続けられてきたパレスチナ人に対するエスニック・クレンジング(民族浄化)の新たな段階であると私たちは判断する。

とくに、1 月 9 日、ザイトゥン地区で行なわれた殺戮は、1 軒の民家にパレスチナ人 110 人を押し込め、そこに複数回砲撃を加えて子どもを含む 30 人以上を殺害したものであり、この明らかに意図的になされた凶行は決して許されることのない戦争犯罪である。また 1 月 11 日、フーザ村で人家に向けて白リン弾を発射したことが報道されているが、空気に触れただけで高温を発する白リン弾は、人体に触れると高温を発し、骨を溶かすほど強力に燃え上がる兵器で、多くの人権団体が使用禁止を訴えている。その白リン弾を人体に向けて発射することも決して許されることのない戦争犯罪である。

私たちは反ユダヤでも反イスラエルでもない。人間に対する非人道的な行為を許すことが出来ないだけである。私たちはイスラエル・テルアビブで 1 月 3 日、今回の戦争に反対するイスラエルの人びと 1 万人が抗議行動を行なったことを高く評価する。私たちはこれ以上、この愚劣で非人道的な殺戮行為を座視することはできない。

よって、これまでに失われた人命と負傷に苦しむ人びとに深く思いをいたし、以下のことをイスラエル政府に要求する。

- ① ガザへの攻撃をただちにやめること。
- ② パレスチナにおける国連人権特別報告者・リチャード・フォーク氏のガザ訪問を認めること。彼による一日も早いガザの立ち入り調査を世界は求めている。イスラエル政府は続けて国連の調査団を受け入れるべきである。
- ③ 一刻も早くガザ封鎖を解除して、必要な食料、燃料を市民に提供し、不足していた医薬品を供給し、攻撃により負傷した人びとの治療を十分に行なうこと。



# 非武装国家への道を考える

12月16日読者懇談会の報告

東京・水道橋のたんぽぽ舎で開かれた12月の読者懇談会は、『軍隊のない国家——27の国々と人びと』（日本評論社）の著者で東京造形大教授の前田朗さんを囲んで、非武装国家の成立条件や問題点などをめぐって話はずんだ。

## ◆非武装憲法は日本を含め5カ国

前田さんの話「27の国々の現地調査を思い立ったのは、非武装憲法を持つ国の法学者として、それらの国の実情を知らないのは恥ずかしいと思ったから。航空便が週に1本しかないなど不便な島国も多く、1国に平均4〜5日しかかけられなかった。事前にウェブサイトでできるだけ調べ、現地では政府機関、大学図書館、新聞社などをまわった。外務省やJICAには最初から協力を頼まない方針だった」。

「結論からいうと、日本の憲法9条の影響を受けている国はひとつもない。非武装憲法を持っている国は、日本を含め5カ国。そのうちリヒテンシュタイン、コスタリカ、パナマは憲法で常備軍を廃止しているが、緊急事態には条文中軍備を持てるこ

とになっている。にもかかわらずリヒテンシュタインは、二つの大戦で非武装を貫いた。コスタリカは憲法だけでなく、ラテンアメリカ総合安保体制としてのボゴタ憲章や国際人権規約に基づいて非武装を決めている。残るひとつ、南太平洋のキリバスは無条件軍備廃止。この憲法の制定過程は今後研究しなければならない」。

## ◆非武装で非同盟の難しさ

「その他の非武装国は、経済上あるいは歴史・地政的な理由から軍隊を持たない道を選んだ。そうした小国の中には、非常時の安全保障として大国と同盟関係や協定を結んでいる国も少なくない。ルクセンブルクの場合、非武装中立だったが2度の大戦で攻撃され、占領された。戦後はNATOに加盟し、ヴォランティア900人がNATO軍に参加している。非武装を思想的につきつめて行けば非同盟になるはずだが、現実にはなかなかそうは行かない」。

「私は地方自治体ごとに非武装中立を宣言する『ピースゾーン運動』に参加している。世界でも、バルト海のオーランド諸島とか、ギリシャ・ブルガリア国境とか60カ所ぐらいある。フィリピンのミンダナオや南米のコロンビアにあったピースゾーンは、一時かなりうまく機能していた」。

## 〈参加者の発言から〉

●「日本国憲法が世界に影響を及ぼしていたら、今ごろ非武装国が100になっていた」と前田さんの本にあったが、私の在日朝鮮人の友人は、憲法9条が歴代政府によって踏みにじられているのを見て、「これでも9条はいいなどと言えるのか」と言っていた。「韓国では、日本人は何をしでかすかわからない、このままでは日本の護憲運動を韓国でも支援しなければならなくなるという声さえある」とも言った。

●ある会合で非武装中立と言ったら、「いま憲法9条が危ないときに、そんなことを言ってる場合じゃない」と言われた。9条の核心は非武装中立ではないか。「自衛隊のイラク派遣反対に幅広い支持を集めるには、自衛隊は違憲といった見解は抑えてもらわないと困る」と言うのだが、こういう遠慮の仕方はおかしい。自衛隊を容認する人たちとも場合によっては手を結ばなければならぬということとは分かるが、基本線をこまかすのは問題だ。

●戦後最大の不況といわれる今こそ、軍事予算はいらない、なくそうという声をもっともっと大きくして行かなければ。多くの人が生きるか死ぬかという中で、けななしの予算はちゃんと使えと要求するチャンスなのだから。軍隊のない国でも存続できることがはつきりしている以上、軍事費を国民生活にふり向けるのは当然だ。

（まとめ・本誌編集委員 本野義雄）

# ソンミ事件と『服従の心理』

吉川 勇一

3月16日、あのソンミ事件(注)から、まもなく41年目の日がめぐって来る。それを前にして、スタンレー・ミルグラムの有名な実験を記した『服従の心理』の新訳が最近、出版された(河出書房新社刊)。長らく絶版、入手が困難だった書物だけに、時宜適切な刊行と言える。イラクのアブグレイブやキューバにある米軍グアンタナモ収容所での虐待、そしてイスラエルのガザ攻撃による大量虐殺が続く今、あらためてソンミ事件とミルグラムの実験を検討することは意味のあることだと思われる。

(注) ベトナム反戦運動にかかわった人なら、ソンミを知らない人はいないと思われるが、若い人びとのためにごく簡略に説明しておこう。これは、1968年のこの日、ベトナム中部の農村ミライ村ソンミで米軍によって起こされた事件で、4時間のうちに504人の村民が虐殺され、一つの村がほぼ全滅させられた。事実は長く伏せられていたが、1年8カ月も過ぎた1969年末になって、参加した兵士、カメラマン、ジャーナリストらによるいわゆる内部告発で全貌が暴露され、マスコミも大々的に取り上げ、特に『ライフ』誌に掲載された虐殺のリアルな写真集は人びとにショックを与えた。軍事裁判も行なわれたが、責任者はほとんど罰せられなかったか、微罪で釈放された。

## ▽虐待や虐殺はなぜ可能になるのか△

虐待や虐殺を行なった兵士は、決して特殊な人間ではなかった。ソンミにかかわった部隊の兵士たちは、すべてアメリカのごく普通の家庭出身の青年たちばかりだったのだ。先日、NHKでアブグレイブでの虐待の象徴的存在とされた当時の女性憲兵にインタビュする番組が放映されたが、この兵士も決して特異な性格の所有者ではなかった。それなのに、普通の人間だったらずやうに思えないこういう異常な残虐行為や虐殺はどうして可能となるのだろうか。

以前、私は、教えていたある女子大のクラスで、ソンミに関するいくつかのドキュ



(ソンミの村民。この撮影の直後、全員が殺害された。)

メンタリーフィルムを見せた後、そう問うたことがあった。多くの学生は、軍隊という極めて特殊な環境の中で、兵士をひたすら殺人機械に変貌させる人間性剥奪のための教育・訓練をその理由としてあげた。確かにそれは大きな要因ではある。ミルグラムもその本の中で、そのことを強調している。だがそれだけだとすると、そういう特殊な人間集団に属していないいわゆる私たち一般市民は、非人道的行為とは縁がないことになりそうだし、またごく僅かではあったが、たとえ処罰されても虐殺命令には従えないとして、命令を拒否した兵士もいたことを十分説明できない。そこを分けるものは、いったい何だったのだろうか。それを考える上で、ミルグラムの実験を再考することは、大きなヒントを私たちに与えてくれる。

## ▽残虐は特殊環境の下でか?△

1960年から63年にかけて行なわれたイエール大学のミルグラムの実験もソンミ事件同様に有名で、結果が発表された73年当時は、ソンミのショックともからんで大きな衝撃をアメリカ社会に与えたのだが、日本ではソンミほどには知られていない。ぜひ、今度の新訳でその全貌にあたってほしいと希望するが、ごく簡略な紹介は、昨年の拙著『民衆を信ぜず、民衆を信じる』にも載せてある(57~60ページ)。

人間は、軍隊のような特殊な環境の中で特殊な教育を受けない限り、虐待や虐殺などの行為をするものではない、ということとは事実なのだろうか。そうではないということ、このミルグラムの実験は明白に証明しただけに、その衝撃は大きかったのだ。

### ▽ミルグラムの実験のショック△

実験に参加したのはイェール大学心理学部のある米コネチカット州のニューヘイブンで公募されたさまざまな性、年齢、職業、学歴を持つふうの一般市民だった。

実験は学習と処罰の関係についての調査だとされ、実験参加者は、自分が相手に出した記憶に関する質問に誤った答えがされた場合、処罰として相手の手に接続された電極に電流を流すよう求められる。電流は、15ボルトから15ボルトずつ次第に増大され、最後には450ボルトにまでなるように設定されている。相手の姿は見えないが、電流が流された場合の反応の声は聞こえるようになっており、電流が強くなるにつれ、反応は苦痛から絶叫に近づいてゆく。

ほとんどはこの実験の途中で参加を拒否し、最後の450ボルトのスイッチまで押すのは、千人に一人ぐらいの病的な人間に限られるだろうというものだった。だが結果はまったくその予想を裏切るものだった。

大学側は、この実験が純粹に科学的、学問的なもので危険はなく、責任はすべて大学が負うと保証したものの、常識的に考えれば、生命を奪う可能性の極めて大きい450ボルトのスイッチを押したものは、なんと参加者の3分の2にまで達したのだ。権威が保証し、命じた場合、ごく普通の人びとも殺人の可能性のある行動をとるのが普通なのだということを、この実験は明白に証明したのだった。

### ▽服従への拒否の問題点△

もう一つ、ごく僅かではあったが存在した虐殺命令を拒否した兵士は、なぜそれが出来たのか、という問題がある。その兵士はイギリスのTVのインタビュに答えて、「そんなこと、白人も黒人も、学歴も関係ない、教会へ行つてりゃ、それがやっちゃいけないことぐらい判るだろう」と答えていた(英ヨークシャーTV)。しかし、権威

への依存や服従よりも、自己の正しいとする信念を上位におくことでそれは可能となるというだけで、答えになるのだろうか。私たちの運動でもたえず主張し、強調している市民的不服従、良心的拒否の姿勢を絶

えず鍛え、自己の生き方の基本とするよう努力することが重要なのは言うまでもない。しかし、ことはそう簡単ではないだろう。

今度の『服従の心理』の翻訳者、山形浩生(ひろお)さんは、「訳者あとがき」の最後に「蛇足 服従実験批判」という論を続けている。そこでは、これまでの通俗的なミルグラム批判(それについては、訳者は説得的な反論をその前に書いている)を超えた疑問点、問題点を5項目にわたり提起している。それには「権威自体の考察」(例えば、良心的不服従の「良心」自体が「権威」になっているのではないか)の必要性など、市民的不服従の実践者が真剣に検討すべきかなり重要な課題が含まれている。自己の正しいとする信念が、独りよがりのもに陥らず、人間的普遍性を獲得してゆくようにするためにも、この訳者の「蛇足」での問題提起は、運動の中で十分検討、討議される必要があるものと私は痛感している。その上で展開される残虐行為、虐殺批判、そして市民的不服従の実践でなければ、ソシミもアブグレイブも、ガザも、今後なお繰り返されることになるだろう。

今日の新聞では、オバマ次期米大統領が、公約だったグアンタナモ収容所閉鎖が「多くの人が考えるより困難だ」として先延ばしの示唆をしたと報じている(『朝日』1月13日)。

(よしかわゆういち、本誌編集委員)



# 日々悪化する難民生活

## ―ヨルダンに逃れたイラク人の場合―

高遠 菜穂子

2006年1月、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は、国内外で難民状態となっているイラク避難民について「1948年に70万のパレスチナ人が難民となった以来の長期的且つ最大規模の脱出」と例え、人道危機であると報告した。

続いて昨年6月に出されたIOM（国際移住機関）の報告書によれば、国内避難民が270万人以上、ヨルダンやシリアを中心に第三国で難民状態にあるのは240万人と推計された。イラクの総人口は2500万人と言われるが、実に5人に1人が難民化したことになる。

ヨルダンへのイラク人流入は、2003年の米英軍のイラク侵攻後から徐々に始まり、2004～2005年末にかけては100万人に近いと言われていた。ヨルダンには人口の約7割がパレスチナ人で、イスラエルを攻撃したアラブの強いリーダー、サダムフセインの人氣が高かった。

しかし、急激なイラク人流入による物価上昇、イラク人富裕層が祖国への絶望感と焦りから不動産を買い求めると、地価の高騰などヨルダン経済を圧迫するようになった。こうしてイラク人に対する風当たりは

強くなり、さらにイラク国内でシーア派の力が強まると、厄介者扱いされるまでになった。

2005年11月に63人が犠牲となったヨルダンの首都アンマンの高級ホテル連続爆破事件は決定的だった。この事件は、イラク西部アンバール州のラマディ出身者による犯行だった。夫婦で自爆を決行したが、失敗し、妻はヨルダン国営テレビを訪れて身体に爆弾を巻き付けたままの衝撃的な姿を全世界にさらした。これを機にイラク人に対する厳しい入国制限が課せられるようになったのは当然のなりゆきだったろう。しかし同時に、イラク国内、特にアンバール州内で起きていた米軍による無差別な軍事作戦による犠牲者を思うと私はやりきれなさでいっぱいになった。おそらく、この女性もラマディで肉親を殺され、怒りと悲しみに暮れる中で過激派に組み込まれてしまったのだろう。珍しい話ではない。

2006年2月に起きたイラク中部サマラのアスカリ聖廟爆破事件で、第三国への避難は激増した。特にシリアに殺到したのは、ヨルダンでイラク人に対する入国制限が強化されていたためである。その他の国

でも、急激に間口は狭まっていた。ヨルダンに入国できないなら、エジプトでイラク支援プロジェクト会議を開こうということになり、2006年12月に私はエジプト入りしてスタッフの到着を待ったが、イラク人スタッフは誰一人入国できなかった。レバノンでは2～3日の入国許可しか出さなくなっており、各国それぞれに入国制限と居住ビザの規定を厳格化していった。このような背景から、プロジェクト会議は、イラク人の入国に比較的大きな東南アジアのイスラム国マレーシアで開くようになったのである。

アスカリ聖廟爆破事件は、一般的に「スンニ派武装勢力によるシーア派宗教施設への攻撃」とされ、イラク内戦の最大の理由とされているが、その真偽はいまだに謎である。この事件を追ったアルアラビアの女性ジャーナリストは、取材中に何者かに殺された。彼女は、それ以前にアルジャジーラの記者をしており、その頃から何度も脅迫を受けていたと聞く。一旦は辞職しヨルダンに滞在していたらしいが、より穏健路線のアルアラビアに記者として復帰した矢先の暗殺だったという。

このアスカリ聖廟事件以前、つまり2005年の移行政府発足以降からバグダッドを中心に組織的なスンニ派大量虐殺は起きており、これらの真相を追求して暗殺されたジャーナリストは数知れない。最



も危険な国」と言われた所以である。海外メディアが取材しにくい状況下、命を落としたジャーナリストのほとんどが現場に赴いたイラク人ジャーナリストだった。

外部勢力に引き裂かれる形で進出した宗派対立は、おびただしい数のイラク市民を非情極まりない殺戮に巻き込んだ。イランのシーア派至上主義の流れを汲んだシーア派民兵はイラク治安部隊に組み込まれ、推定5万人のスンニ派を拷問殺害したと言われている。一方、過激なスンニ派勢力は、シーア派民兵扮するイラク治安部隊や、それを主導するイラク内務省や米軍への攻撃を激化させ、未曾有の市民が犠牲となった。こうして、イラクで長きにわたり保たれていた共存社会が分断されていったのである。二〇〇五年以降にヨルダンやシリアに流れてきたイラク避難民のほとんどが、こうした宗派対立で凄まじい経験をしている。

### ・厳しいヨルダンの生活

現在すすめているイラクプロジェクトは、やはりこうした国内外の避難民支援が中心になっている。対象地域は三カ所に絞り、バグダッド、ラマディ、そしてヨルダンにそれぞれ食料、浄水器、暖房器具、発電機、防寒具などを配布している。

昨年からパートナーシップを結んでいるのは、ヨルダンでイラク避難民を支援するグループだ。このコラテラル・リペア・プ

ロジェクト(CRP)は、2年ほど前にアメリカとイラクのボランティアで発足した草の根のグループなのだが、目覚ましい活躍をしている。今では、国際NGOからヘルプを求められるほどの存在になった。しかも、メンバーはほぼ全員が女性。もちろん、イラク人側は全員が避難民である。昨年、彼女たちに出会った時、その働きぶりに感動した。それまで、地獄の底で絶望の数を数えていたイラク人が蘇った、イラク人の底力を見た、そんな気がしたのである。以来、彼女たちとアンマン中を飛び回り、家族調査をするなど、いろいろな支援を協力して行っている。

ここからは、そうした家族調査から見えてきたヨルダンのイラク避難民の様子をお伝えしたい。

現在、ヨルダンには70万人のイラク避難民がいると推計されるが、UNHCRに登録しているのは6万人程度とみられている。その理由としていくつか挙げられるが、あまりにも急激にその数が増えたため、国連の登録業務が追いつかないという事実がある。また、登録完了までに数カ月の時間を要することや、登録場所までの交通費を捻出できないという理由で、登録をあきらめている人たちも少なくない。

UNHCRに登録していれば、国連の出先機関から経済面のサポートを受けられることになっている。平均すると、四人家族

で月額120〜180ヨルダンディナール(約1.5万円〜2万円)が生活費として支給されるが、半分以上が家賃と光熱費で消えてしまう。さらに食料配給ももらえないことになっている。

しかし、子どもたちの学費や医療費などを支払うにはこの月額では苦しい。昨年の夏頃まで、イラク人の小中学生がヨルダンの公立学校に通うには、ヨルダン人の9〜15倍の学費を払わねばならず、これが家計を圧迫していた。学費や交通費が払えない、学用品や制服が買えないことで学校に行けない子どもたちが急増し、小中学生の留年が目立っていた。

いじめが原因で登校拒否になった子どもたちのことも気になっている。当初はイラク人全体に対するいじめだったが、イラク国内で激化する宗派対立の余波を受けて、最近はシーア派イラク人に対する差別やいじめが増えているという。学校の先生がわからさまに嫌がらせをするケースも、全くないわけではないようだ。

ヨルダンはスンニ派が多数を占める国である。実際、ヨルダン人の大人の会話にも変化が見られる。先日、支援物資を買い出しに行った洋服問屋で、ヨルダン人オナーが、私の隣にいたイラク人の友人に宗派を聞いていた。滞在先のホテルのスタッフも、宗派の話をするのが多くなり、シーア派を警戒する発言をよくするようになった



ヤヒヤと筆者

た。

現在、前述のイラク 人生徒に対する学費割増制度は撤廃され、子どもたちも学校に戻り始めた様子があるが、どの子どもも学校以外に出かけることはほとんどないようで、天真爛漫な小学生にはほとんど会ったことがない。インタビューを続けるうちに、子どもたちのPTSD（心的外傷後ストレス障害）が深刻であることに気づく。

9歳男子のヤヒヤは、2年前に目の前で父親を殺されている。バグダッド市内を車で移動中、武装集団が突然襲いかかり、運転席のドアを開けて父親の首を切り落とした。その直後に家族はヨルダンに逃げてきていた。国際NGOの診断書には、「深刻なPTSD」と書かれてあった。ヤヒヤの描くのは今も首切りの絵だという。

6歳女子のドゥーディは、父親が民兵に誘拐された時のことを覚えている。3年前、深夜に押し入ってきた民兵が家族を叩き起こし、父親を連れ去った。後に父親は無事に帰ってきたが、3歳だった彼女の脳裏にはその光景が強く焼き付いている。インタ

ビュー中に母親がその話に触れた時、私の膝の上で遊んでいたドゥーディは身体を硬直させた。

その他、半年間も生理が来ない十代や二十代の女性たち、暴力的になってしまった男の子たちもいる。人と口をきけなくなってしまう子どもたちも少なくない。娘や息子が何年間も部屋にひきこもったまままだと訴える母親たちにもよく出会う。戦争は、子どもたちに暗く重い影を残した。明るく振る舞って、お姫様の絵や私の似顔絵を描いてくれた女の子も、一人になると血だらけの人間を描いていた。

この数年間にヨルダンに逃げてきたイラク人は、多くの場合が突然の事態であるために、着の身着のままやって来ている。みな口をそろえて言うのは、「ヨルダンにこんな長く居ることになるとは思いもしなかった」ということだ。そして、一家を養わなければならない父親を亡くしているケースが非常に多い。父親が健在だとしても居住権を持たないイラク避難民はヨルダンで就職することができない。すると、妻や子どもたちまで日銭を稼ぎに出かけるパターンが多くなり、自信を喪失した父親がDVに走る傾向が見られる。「お父さんが怖い、嫌い」ともらす子どももいれば、夫に殴られ顔を腫れ上がらせて泣きじゃくる妻たちもいる。DVと認められるケースもこここのところ増えているように思われる。

予想外に長引く避難生活で、収入はないままに支出だけは増えている。まずは、身につけていた貴金属を少しずつ売り、貯金を切り崩す。今では、ほとんどの人がイラクの自宅や車は売ってしまったという。

イラク国内が地域によっては治安が安定してきているということで、父親だけイラクで仕事をしているというケースも増えてきた。しかし、家族全員を呼び寄せる段階にはまだないようだ。家族の方も、あまりに強烈な体験をしているため、イラクに帰ることはまだ考えにくいのだろう。現段階では、圧倒的に第三国への亡命を希望する人が多い印象を受ける。

### ・国際NGOの資金も底をつく

ヨルダンでイラク避難民が医療を受けようと思うと、保険がないので費用は全額負担になる。しかも、完全前払い制だ。緊急手術が必要だと診断されても、現金をきっちりそろえて前払いしないと、患者が目の前にいても手術はしてくれない。

国際NGOがイラク避難民の医療費をサポートしているが、あまりにも多くの重篤患者が押し寄せているため、申請してから少なくとも3カ月は待たなければならぬ。しかも、現金支給がもらえないことになって、手術費用の5分の1しか認められないこともある。つまり、国連と同様に国際NGOも資金が底をついてきているのである。

また、国際組織が運営する赤新月社やイタリアン病院は費用が安くはなるが、順番待ちで数カ月かかることもあり、その間に亡くなる人も出ている。

前々回のヨルダン滞在中（昨年10月）、悲惨なケースがあった。30代男性、肺の病気を患っていた。病院で手術を勧められており、費用は約3万円。家にはまったく言っていないほど金がなく、近所のイラク人にカンパを募ったが、30ヨルダンディナール（約4000円）しか集まらなかった。男性の症状が悪化し、いよいよ大変だという時に、CRPメンバーのことを聞いたらしい。連絡を受けたアンマンチームのリーダーは、すぐに3万円をかき集めて患者の元に向かったが、男性はすでに息を引き取っていた。全員が非常に悔しい思いをしたが、このことをきっかけに、イラク人の富裕層の人たちが緊急医療支援のカンパを集めることになった。

ヨルダンに行くたびに、目に見えてイラク人の経済状態が悪化している様子が見える。私はその姿を見るたびに、イラク戦争を止められなかったことを悔やむ。私たちは、あまりにも多くの「やってはいけないこと」をやってしまった。今はただ「やるべきこと」を誠心誠意、全身全霊でやるしかない。

（たかとお・なほこ、イラク支援ボランティア）

## 37年目の『冬の兵士』

田保寿一

去年3月、アメリカのワシントンDC近郊でイラク帰還兵たちが、厳しい冬の時代に戦う兵士という意味の、ウインターソルジャーⅡ冬の兵士と名づけた証言集会を開いた。ウインターソルジャーは、これが初めてではない。1971年デトロイトで同じ名称の集会が開催され、ベトナム帰還兵たちが、ベトナムで住民を虐殺している事実を公表し、ベトナム戦争を終結に導く大きなきっかけとなった。それから37年後、イラク帰還兵が71年のウインターソルジャーにちなみ同じ名前前で戦争犯罪を告発する証言集会を再び開催したのだ。

私は、去年1月からアメリカで帰還兵の取材をしていたため、引き続き、ウインターソルジャー2008を取材した。120万人以上のイラク市民が死亡したと推定するリポートも出ている戦争で、アメリカ軍の闇の部分が公表されるというのに、なぜか大手マスコミの記者の姿はなく、日本のメディアとしては『赤旗』紙の記者だけしか取材に来ていなかった。

会場の全米労働大学は、若者たちの熱気があふれていた。帰還兵たちの多くは20代、高校生の時にリクルートされ、卒業後

すぐに入隊した人が多い。この証言集会は反戦イラク帰還兵の会ⅡVAV (Iraq Veterans Against the War) が主催した。VAVは2004年7月に①占領軍のイラクからの即時撤退②イラク国民への賠償③帰還兵の精神面での医療保障を含めた福祉の実現、を求めて結成され、全米に42の支部をもち、800人を超すメンバーがいる。2007年ごろから活発な反戦活動をするようになり、2008年3月13～16日までの4日間、占領軍を撤退させるため、イラクで自分たちが何をしてきたか証言する集会を開催したのである。

ウインターソルジャーで明らかにされた基本的な事実は、アメリカ軍が戦争に関する国際法を守らず、イラク住民を無差別殺戮しているということだ。戦闘のルール「交戦規定」というテーマで4時間15人の帰還兵たちが証言し、米軍の市民虐待、殺戮の実態が明らかにされていた。また、元海兵隊員・ジェイソン・ウオッシュバーンさんは、市民を誤って殺害した場合、それを隠すために偽装ツールを日常的に持ち歩くことが奨励されていると証言、嘘で固めた占領の実態が公表された。

帰還兵たちの反戦活動を当局は無視しているわけではない。2007年に、IVAW会員のアダム・コケシュさんが反戦活動中に制服を着ていたとして処分が検討された。米軍では、除隊の扱い方で、恩給などで差別されるが、コケシュさんは4つもの勲章を授与されているにもかかわらず、名誉除隊とされず普通除隊扱いにされた。帰還兵の行動を細かく監視している軍は、ウインターソルジャーの証言者にはまだ処分を公表していない。しかし証言をするにあたって、証言者たちに大変な勇気が必要だったことが想像できる。

集会ではおよそ50人の帰還兵たちが証言のため立ち上がったが、彼らはとても過酷な状況に置かれている。マイク・ロビンソンさんは、バグダッドの北にあるバラド空軍基地に派遣されていたが、IED（仕掛け爆弾）に足を吹き飛ばされ帰国した。社会復帰をした彼は、ささいなことで怒りの発作が起きるようになった。感情がコントロールできないことは、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の典型的な症状である。夫婦喧嘩が頻発し離婚。仕事中、女性の大きな声に感情が爆発し、ものを投げて解雇され、ホームレスとなった。自殺のことはあまり考えるようになったという。彼は、現在帰還兵の専門病院で一緒にPTSDの治療を受けている仲間の福祉を担当している。彼は、私にPTSDの問題を詳しく語っ

た。「イラク戦争が悲惨な問題をたくさん生み出しているにもかかわらず、アメリカのマスコミは報道しようとしないう。それなのに、日本人が取材に来てくれたことに感謝する」と言ってくれた。

昨年来日したIVAW会員のアッシュ・ウオールソンさんも、仲間の健康や福祉の世話をしているという。イラク戦争の被害者はイラク人だけではない。イラク人を虐殺した帰還兵たちが、苦しみながら戦友同



イラク帰還兵の証言集会—ウインターソルジャー—の記録が「冬の兵士 良心の告白」というタイトルでDVDとして完成しました。製作は冬の兵士製作委員会です。

一部映像をYouTubeで見ることが出来ます。

[http://jp.youtube.com/watch?v=KYW\\_JuCV9J8](http://jp.youtube.com/watch?v=KYW_JuCV9J8)

DVDについての問い合わせ先は、  
冬の兵士製作委員会

03 - 5950 - 4710 (田保)

士助け合い、良心をかけて自分たちの国で反戦運動を始めた。彼らは兄弟姉妹と呼び合っている。ワシントンDCの街頭で見かけたウインターソルジャーのポスターには、「あなたは一人ぼっちじゃない」と大きく書かれていた。

(たば・じゅいち、ジャーナリスト)



## 回り回って

2008年師走のことだ。テレビニュースは、日本人科学者3人が出席したノーベル賞授賞式のようなすを映している。ノーベル賞委員会のプレゼンターが、授賞理由を日本語でスピーチするという〈異例の対応〉をしたと伝え、いささか頼りない日本語の発音が流れている画面を眺めながら、十年近く以前の、スウェーデンにまつわる体験を思いだしていた。書物の組版から印刷までが、金属活字や写真植字に頼らずに、パソコンを中心としたデジタル技術でなし得るようになったところのことだ。ある夜、東京のスウェーデン大使館でシンポジウムが開かれた。来日したスウェーデン文学者が、少部数の出版の可能性と意義を、実践を通じて静かに語った。会のあとは立食パーティーが控えていた。

話の内容は、いわゆる〈オンデマンド印刷〉で、現在では街角でも見かけるサービースだ。ではなぜ、複写機や印刷機メーカーではなく、スウェーデン文学者が〈オンデマンド印刷〉について、わざわざ語らなければならぬのか。かの文学者は、英語に押されて、スウェーデン語による文学の出

版がむずかしくなっている、と言う。少部数を運命づけられている純文学は、ますます採算ベースに乗らない状況だ。そこで、少ない部数にすばやく対応できる〈オンデマンド印刷〉に活路を見いだそう、との趣旨だった。彼はさらにつづける。文学の新刊が当たり前のようにつぎからつぎへと出版される国は、世界を見回しても少ない。記憶があいまいなのだが、たしか「20カ国もない」と告げたのではなかったか。

スウェーデンほどの大国でも母国語による文学出版が困難なのか、とおどろくと同時に、日本のことを考えざるをえなかった。母国語で新刊が当たり前のように読める幸福を、わたしたちはどれだけ噛みしめているのか。世界から忘れられがちな〈小さな〉国では、ごく限られたエリートとインテリだけが、外国語で文学を読めるのだらう。フーテンの寅さんなら「さしずめ、てめえはインテリだな」とのたまうところだが、じつさいには、ふつうの人びととインテリが出会う機会も減多にないのではないか。

授賞式でノーベル賞委員会が日本語の

〈異例の対応〉をしたのは、演出や社交的なサービースからだけではない。英語の脅威を背景にした、母国語どうしの切迫したエールの交換だった気がする。想像だが、益川敏英さんの「記念講演は日本語で」という意向の背景には、「自分の研究は日本語で思考しているのに、なんで英語で発表しなければならないのか」との違和感が潜んでいる。

「P/SIGN デザイン」というデザイン批評誌の責任編集をして、かれこれ8年になる。さまざまな著者に原稿依頼をしてきた。もちろん例外はいくつもあるにしても、がいて大学教員の書く原稿がおもしろくない。まずサマリーがあり、節ごとに論証を積みあげ、引用や注記で足許を固め、やがて一定の結論にいたる学術論文のようで、破綻がない。起承転結の「転」がなく、序破急の「破」がないとも言おうか。

思考の発露である文章にも、アメリカカン・イングリッシュを基底としたグローバルイズムが浸透しているのかもしれない。そもそも、この文章でさえ、米国製のパソコンとOSによって書かれている。回り回っているのだ。グローバルイズムを非難してもはじまらない。(当たり前)を見直すことからしかはじまらない。国産エンピツのありがたさは、文学や出版にもつながっている。

(すずぎ・ひとし、グラフィックデザイナー、題字デザインも筆者)

女優 有馬理恵さんに聞く

## 『差別』を表現する

「ご出身はどこですか

はい、和歌山県です。昔の被差別部落といわれた地域で生まれ育ちました。

父は違う地域で生まれたんですが、8人兄弟の末っ子で喰い減らしのため捨てられ、生まれてすぐ被差別部落の祖母にもらわれたんです。親戚は皆「もらわれっこ」で血はつながっていませんが、父も私も親戚たちに狂おしいほど愛され育てられました。

母は違う地域で生まれ育ちましたので、父と結婚するとき家族に大反対され、家を出して父と結婚し、私が産まれました。

家のまわりには牛の皮をはいで皮革を製造する工場がたくさんありました。

―役者さんになろうと思ったきっかけは

高校2年生のときに、火葬場の娘が花岡事件を語るといって水上勉さん作の『釈迦内棺唄（しゃかないひつぎうた）』を観たんです。主演は浅利香津代さんでした。芝居を観たあとショックで気絶してしまい、気がついたらスタッフさんが舞台上を片付け始めて

いました。そのあとショックのあまり学校に1週間行けませんでした。

―何がショックだったのですか

たぶん自分と重ねあわせたんだと思うんです。実はその1年前に母方の祖母が重病だということで16歳で生まれて初めて会いに行ったんです。母も結婚して17年間に会えず、初めて会いに行ったんですが、そのとき祖父に玄関まででそれ以上入ってくれるなど言われたんです。自分の血のつながった祖母に会うのが初めてだったのも、ものすごくワクワクして行っただけですが……。そのときものすごくショックでものごうい怒りがわき、一生あんなたちに会うものか、って心の中で誓ってその家を立ち去りました。で、その1年後にこのお芝居を観て、自分の中で封印していた何かが解け、違う生き方があるのではないかと気づかされたんです。で、1週間悩んだ後祖父にもう一度会ってくれませんかと言紙を書きました。そうしたらいついつ来てくださいますかという返事が来たので会いに行きました。今年間は居間まであげてくれたので、「なぜ16年間会えなかったのですか、初めて会ったときになぜ玄関まででそれ以上入ってくれるなど言ったのですか」って質問しました。そうしたら彼は戦争中任務として満州でスパイをしていて、終戦後、戦争犯罪人B級戦犯として服役したんだと。あの戦（いくさ）ではこういう戦略を考えて勲章をも

らったとか私の質問とはぜんぜん関係のない話を1時間くらいするんです。その話の間に、「僕の頭の中には天使と悪魔がいて、ずっと悪魔が勝ちつづけていたんだー」って何度も涙を流すんです。けれど次の瞬間また戦の栄光話をたんと泣きながらするもので、こっちは泣けてきて。それがなんとなく私に対する謝罪とかメッセージのような気がしたんです。私は17歳だったので、おじいちゃんは悪くない、世の中が悪かったんだよって心の中で思っていました。でも今は、悪いとわかっていてなぜ天使が一度でも勝つことがなかったのかと思います。私は祖父の生き様から学び、再び祖父のような生き方を選ばざるをえない世の中にしないために、自分は違う人生を歩みたいといけないうちで思っています。

―ところでロラマシンの芝居（フイリピン）の従軍慰安婦を扱った憲法ミュージカルに出会ったときはどうでしたか

はい、1年前に監督から演出補助とロラマシン役にと話をしていただきました。『釈迦内棺唄』を引き受けたときと同じように自分の活動とも役者業とも自分の人生観ともびったりあった仕事だと思っているのでやらせていただきたいと思う反面、ものすごく恐怖がありました。私がやってはいけない領域なのではないか。検証してはいけないからわからないのですが、祖父もたぶん慰安所をつくった側の人間で、その孫がやっていい

のだろうかと思ひ悩んだ時期もありました。悩んだすえフィリピンに行つてみました。

—ロラマシンに会つたのですか

いえ、もう亡くなられていました。2007年4月6日に亡くなられたのですが、亡くなる一週間前に「わたしは死ぬ前に正義が実現されることを願います。」と、当時の安部晋三首相宛に手紙を書かれて。それでロラマシンが育てられた息子さんに、彼女がレイプされたところとか、日本兵に連れまわされたところとか案内してもらいました。マニラから50マイル南にあるパナイ島アンティケ州サンホゼ市という半径3キロくらいの小さな町です。1942年4月17日に石原産業が入つていた鉾山を反日ゲリラから守るために日本軍が入つたようです。ロラマシンの家にも兵士が突然やつてきてロラマシンを連行しようとし、お父さんが抵抗したため首を切られ、彼女が2年後に戻つたときお父さんの骨はばらばらになつていたそうです。おそ



撮影 郡山総一郎氏

らく犬が食べてしまつたのじゃないかつて。彼女が育てた息子さんは4人いて、私はウィリアムさんに案内してもらいました。ウィリアムさんは血縁関係ではロラマシンのイトコだつたんですが、彼のご両親も日本兵に殺されたそうです。殺された現場に行つたんですが、2階建ての駐屯所の隣に広場があり、日本軍はそこに穴を掘つて丸太を置き、その上にフィリピン人を立たせて首を切つていったそうです。穴に首と胴体が落ちて、落ちた死体を野良犬が食べたそうです。誰が反日ゲリラかわからないからすべての大人を殺していくということをしたらしいです。それからマニラに戻ると大々的な記者会見が待つていました。会見では、ロラマシンのところに行きあなたは何を思つたのか？ 日本政府は教科書から「慰安婦」という言葉を取るつて言っていますが、そういう日本政府をあなたはどう思いますか？ このミュージカルをやつたところで日本政府の見解を変えられると思ひますか？ と、すぐく攻撃的でした。私が「本当に申し訳ありません。ミュージカルをやれば三百人の市民が6カ月間学習をするのでそこから何か意識が変わるだろうし、1万6千人の人たちが見るので、少ない数かもしれないけれど、そうやって動かしていくことが日本政府を動かしていくことになるつて信じているんです」と言つたら、突然「連帯しましょう。僕たちも同じ

思ひです。あなたたちのミュージカルを支援します」つて。

実はフィリピンのロラマシンを取り上げたということで批判もあつたんです。なぜロラマシンなのかと。アジア女性基金を受け取つた人をなぜ英雄視するのかと。私たちは英雄視しているつもりはまづかかつたのですが、バンドラの箱を開けてしまふことになるのかもしれない、いまはまだ踏み入れてはいけない問題なのかなあつて、とても不安になりました。ところがフィリピンに行つたら事情が違つて、そのときに別れた団体もいまはそれぞれ違うモチベーションでやつているので、日本の次世代の人たちはその歴史から学び、それらの歴史をすべて踏まえたうえで次に進むべきなんじゃないかつて。朝日新聞マニラ支局の木村文さんに教えていただきました。

—今年の予定は

はい、「釈迦内棺唄」で全国をまわります。2月14日京都の浄土真宗本願寺が初日で、そのあと3月10日が多摩。3月11日が八王子。3月14日が浦和の埼玉会館です。—「活躍をお祈りしています。がんばってください。

(聞き手・細井明美・本誌編集委員)

有馬理恵さんのプロフィール

劇団俳優座所屬。1999年より「釈迦内棺唄」をライフワークとして各地で上演。3歳の息子の母。

# 海賊対策で海外派兵なんて、 おかしい！

編集部

## 海外派兵で気になることばかり

昨年末、航空自衛隊はイラクでの活動を終えて帰ってきましたが、アフガニスタンでの米軍の作戦を支援する給油新法改正案はとうとう成立させられ、海上自衛隊のインド洋での給油活動は今年1月から1年間延長されることになりました。新アメリカ大統領オバマ氏は大統領選でアフガニスタンを主戦場にするとの公約しましたが、実際、米軍の増派戦略は動き出しています。麻生政権はアフガン本土への自衛隊派遣にはまだ踏み切りませんが、復興支援を名目にオバマ新政権に迎合しようとしています。それだけでも心配なのに、麻生首相はさらに危険な動きを速めています。海賊対策のための海外派兵がそれです。

## 強引に進められる海賊対策

東アフリカのソマリア沖で起きている海賊事件に対応するため、NATO（北大西洋条約機構）加盟国が次々にソマリア周辺・アデン湾口一帯に軍艦を派遣しています。

中国も艦隊を派遣しています。そこで麻生首相は日本も「バスに乗り遅れるな」とばかり、海賊対処派兵を強行しようとしています。そのありさまは、2001年の「9・11」直後に当時の小泉首相がとった前のめりの姿勢そっくりですが、それだけではなく、日本の海外派兵を新たな段階に押し上げようとする危険な意図を感じさせます。

麻生政権は、（1）「海賊行為対処法」のような一般法を制定する（2）海賊対処特措法を制定して対応する（3）海上警備行動を発令して海上自衛隊の護衛艦をソマリア沖に派遣するという3種の対応を考えているようですが、現在のいわゆるネジレ国会では（1）も（2）も早期実現は望めないとして、（3）が当面の政策として押し出されています。1月15日付の『中国新聞』は海上自衛隊呉基地所属の護衛艦2隻が派遣をにらんで準備を始めたと伝えています。

## 強引な拡大解釈による艦隊派遣

海上警備行動は自衛隊法第82条（注参照）に規定されていますが、それはもともと海

外での海賊取締りを想定していません。海上警備行動発令はこれまでに2度ありますが、それらはいずれも日本領海内に入った不審船（99年）と中国潜水艦（04年）への対処でした。日本を遠くはなれたアフリカ沖での海賊対処に海上警備行動を発令できるという麻生政権の見解はまったく恣意的な拡大解釈です。海上警備行動は閣議決定で行なえ国会の承認を必要としないため、防衛省幹部でさえ「安易に使われると世界中どこにでも行け、となりがねない」と懸念しているほどです（昨年12月26日付『毎日新聞』）。麻生首相が強気である背景には、国連安保理がソマリア沖への海軍派遣を要請する決議を行ない、昨年12月にはソマリアの領土・領空での海賊制圧を認める決議を採択したことがあります。だから多少の拡大解釈も許されると考えるのはまったくおかしいことです。

※注 自衛隊法第82条 防衛大臣は、海上における人命若しくは財産の保護又は治安の維持のため特別の必要がある場合には、内閣総理大臣の承認を得て、自衛隊の部隊に海上において必要な行動をとることを命ずることができる。

## 海賊への対処は海上保安庁の任務

海上警備行動は、海上保安庁では対応が困難な場合に職務を代行することになっていますが、海上自衛隊はもともと海賊対処の訓練をしていません。海上保安庁法は



同庁が「海上における犯罪の予防及び鎮圧、海上における犯人の捜査及び逮捕」を任務とすると定めています（第2条）。ですから海賊対策にも熟練しているといわれます。「マラッカ海峡の海賊対策では、同庁がアジアの沿岸各国と情報を共有する体制を築き、人材育成を支援してきた実績がある」（昨年12月26日付『北海道新聞』社説）。そのため、同海峡での海賊事件は激減しました。ソマリア沖での海賊事件について、海上保安庁はイエメンやオマーンなど沿岸諸国に働きかけてマラッカ海峡での経験を活かそうとしています。

## 麻生政権の姑息な手法

海上警備行動で海賊に対処することができないため、政府が考え出した対策は実に奇妙なものです。ソマリア周辺・アデン湾口に派遣する海上自衛隊の護衛艦に海上保安官を同乗させ、その保安官の権限を活用して、「日本船舶の乗船者に対する殺人や逮捕監禁など重要犯罪を行った海賊の身柄を拘束し、刑法の国外犯規定を適用して逮捕・起訴する」というのです（1月3日付『産経新聞』）。しかも海上警備行動では日本船舶と日本企業が管理する「日本関係船舶」しか護送できないため、政府は「日本籍船舶のほか、（1）日本企業が運航を管理している外国籍船舶（2）日本人が乗船している船舶を海自艦艇で護送することが可能と判

断した」というのです（昨年12月24日付同紙）。これもまた強引な拡大解釈というしかありません。（1）と（2）に該当する船舶は膨大な数に上ります。こんなことが許されるなら、海上保安官を同乗させた海上自衛隊の艦隊が「海上警備行動」を名目に世界のどの海にも展開することになるでしょう。とんでもない話です。

## 海賊派兵を急ぐ理由

麻生首相がムリにムリを重ねて海賊対処派兵を急ぐのは、この際、自衛隊による武器使用基準を緩和したいからであり、また集団的自衛権行使の既成事実を作り出したいからです。海上警備行動は法的には警察行動ですから、武器の使用は正当防衛と緊急避難の場合に限られます。

凶悪な海賊に対処するのにそういうシバリがあるのはおかしい、例外的にでも武器使用基準を緩和すべきだと世論を焚きつけたいのです。それがアフガニスタン派兵、さらにそれに続く派兵をにらんだ布石であることは明らかでしょう。「海賊」をダシに使う米軍並みの武器使用をめざしているのです。

ソマリア周辺・アデン湾口で他国の軍艦とともに行動することに、集団的自衛権行使の先例作りの意図が含まれていることも確かでしょう。麻生首相があえて海賊対処は「集団的自衛権の問題とは関係ない」と

強弁しているのは、かえって問題の所在を明らかにしています。

## 「海賊退治」ではなくソマリア社会の再建を支援すべき

ソマリアでは、ひたすら無秩序と暴力が支配し経済も社会も崩壊しています。91年の内戦以来、全土を統治する政府が存在しないのです。「アフリカの角」といわれる戦略上の要地であるために、くりかえし大国や隣国の介入を招き、ソマリアの人びとは社会の再建を自力で図る機会を奪われてきました。ソマリアの漁民が「海賊」化したのは、90年代初めに欧米の大企業がソマリアの政治家・軍幹部と交わした廃棄物投棄協定によって放射性物質を含む有害化学物質が海域を極度に汚染したからです。国連安保理の決議はその現実を直視せず、国際社会としての責任を果たそうとしません。軍事介入ではなくソマリア社会の自力での再建を支援することが何より大切なのではないのでしょうか。「海賊退治」ではなく海賊を無数に生み出す土壌に目を向けることが必要です。経済で行き詰まった麻生政権が失策から目をそらさせるための「海賊派兵」に大きな声を上げて反対しようではありませんか。（1月15日記）

（文責・細井明美（本誌編集委員）／井上澄夫（同））

# 「国境を越えた労働者民衆の交流・連帯」で 重慶大爆撃裁判に勝利しよう

三角 忠

## 「なぜ大爆撃」なのか？

2006年3月30日、「日本が1938年から43年にかけて中国重慶市および四川省全域にわたって焼夷弾などによって加えた無差別爆撃によって非戦闘員である婦女子・老人が大量に殺傷されたことを戦時国際法に違反する重大な戦争犯罪であること」を認め被害者に対し謝罪と補償を行え」と国（政府）を被告にして、自分および家族がこの爆撃によって重大な被害にあった40名中国人民が原告となって東京地方裁判所に訴状を提出した。

日本の中国侵略中、重慶市（現在直轄市）と四川省に対する日本の航空部隊が行なった無差別爆撃に対し原告らが加害国である被告日本に謝罪と賠償を求めた裁判の開始である。

「なぜ重慶大爆撃」なのか？それは、1938年2月から1943年8月までの5年半にわたり、連続反復して無差別爆撃を繰り返して、死傷者総数が10万人を越え、家屋や店舗を失った人は100万人を優に越える文字通り「大爆撃」であったからで



ある。

## 今日まで続く「無差別爆撃」の始まり

重慶爆撃は、それまで日本軍がタテマエではあれ、掲げていた「軍事目標主義」をかなぐり捨てた「無差別爆撃」であった。

たしかに前年の1937年、スペイン・ゲルニカに対するナチス・ドイツの空爆はあった。しかし、このように長期間、しかも「無防備都市」である重慶および四川省周辺地域に対する「戦略爆撃」が、イギリスがドレスデンを、アメリカが東京大空襲をはじめとした日本の各都市に加えた空からの無差別爆撃、広島・長崎に対する原爆投下へと続いていったのである。しかも、それに止まらず、第二次世界大戦が一応終了したあとも、アメリカは朝鮮戦争、ベトナム戦争において、NATOはコソボへの爆撃で、ブッシュはイラク、アフガニスタンで、重慶の「無差別爆撃」を学んで雨あられとナバーム弾を、劣化ウラン弾を、労働者・民衆の上におとしているのだ。

重慶大爆撃から70年、このように全世界の無辜（むこ）の民衆は今も残虐に殺されている。

そのルーツがこの重慶大爆撃なのである。

## 予見される政府と司法の論理を打破する

1006年に出発した重慶大爆撃裁判は現在すでに第8回まで進んでいる。原告は

その後、二次、三次と訴状を提出し135名を数えるに至った。

第1回裁判から、遠く重慶、楽山の原告が来日し、その数15人が意見陳述した。東京地方裁判所は、国際的にも注目を集めているこの裁判が多数の傍聴人が参加することとを申し入れてきたことを一応受け入れて、民事部で一番広い103号法廷を用意した。ここに出廷した原告が、肉声で直接被害状況を訴えたのである。原告・家族が受けた



日本軍による無差別爆撃がいかに残虐で非人道的なものであったかを生き証人でなければ陳述できない迫力で法廷を圧したのである。

中国人を原告とする戦後補償裁判は、1995年6月の花岡強制連行事件の提訴にはじまり、現在までに約30件の裁判が提起されている。

これらの裁判で1997年から一審判決が現れるが、最初の数年間は裁判所が被告の日本国や日本企業が主張する法理論（「国家無答責の法理」）を採用したために原告敗訴の判決があいついだ。

「国家無答責の法理」とは「国家賠償法施行前の加害行為については、大日本帝国憲法下では国の権力的作用については民法の適用は排除されるなどの理由から、国の損害賠償責任は認められない」という法理なのである。

また「個人賠償請求権の放棄」論は日中共同声明五項「日本国に対する戦争賠償の請求を放棄する」ことが根拠であり、それをもとに2007年4月27日、広島高裁が「西松建設事件」で原告勝訴した判決を最高裁はくつがえしたのである。

弁護団はこうした二つの最高裁判決で司法上確定したかにみえる原告敗訴の法理のただ中でそれをくつがえしていく根拠をつくっている。

## 「国境を越えた交流・連帯」こそ勝利の力

こうした東京地裁を舞台にした重慶大爆撃裁判は、しかし、明確にそこだけで勝利の扉をこじあげようとしているわけではない。

例えば「ブーメランのように返ってきた」（当会前田哲男代表の言）東京大空襲の原告団が、提訴以前の2006年10月、重慶を訪問し、重慶大爆撃訴訟の原告団事務所を訪問。代表して中山武敏弁護士が「東京空襲の被害者も日本の国の責任を問う裁判を起こす」と明らかにし、遺族会副会長の安藤健志氏は「重慶大爆撃は東京大空襲に繋がっている。重慶爆撃の被害を受けられた皆様に日本国民としてお詫びをしたい」と述べた。

「政府の行為によって戦争の惨禍がもたらされ」と憲法前文には厳格に戦争がどうして起こるかを記載してある。九条二項の「交戦権の否認、戦争の放棄」と一体である。「戦争責任」「戦後補償責任」を政府にとらせることこそ、改憲と戦争を阻む大きな力になる。

中国侵略がなかでもその最大の課題である。原告団同士の交流の深化がそれを保障している。真の日中友好ががちとられつつある。

（みすみ・ただし、重慶大爆撃裁判の被害者と連帯する会・東京 運営委員）



# 意見広告運動事務局

## からの報告

意見広告運動第8期スタートの昨年は、事務局での作業の傍ら、スタッフで手分けして幾つかの講演会や集会、デモなどに参加して、意見広告賛同者募集のチラシを配りました。それと同時に参加した講演会の内容を簡単にレポートして、写真とともにホームページにアップしてお互いに勉強し、併せて意見広告のPRにするという取り組みをいたしました。

ホームページに既に載っている記事と重複するかもしれませんが、パソコンは見えないという読者の皆様のために、その中の幾つかのレポートやチラシ配りの感想などをご紹介いたします。

### ・ 一歩一歩、チラシ1枚から

私が一番印象に残っている講演会は、9月13日、九条の会学習会「名古屋高裁判決と派兵恒久法」に参加した時の、弁護側証人であった愛知大学教授の小林武さんの「生きている九条と平和的生存権」というお話です。

永田町の星陵会館に事務局スタッフ3人で行きましたが、小林さんはこの画期的な判決について、平和を願う日本人の地道な努力と、高いレベルの弁護団、その証言に真

摯に耳を傾ける3人の裁判官の誠意が名古屋の地で結晶したものだと言われました。小林さんの格調高いお話には、違憲判決が下された瞬間から法廷中に静かに広がっていったという傍聴席の鳴咽と深い感動を、今そこで共有しているような臨場感がありました。

また、判決の文章の「控訴人らは、それぞれの重い人生や経験等に裏打ちされた強い平和への信念や信条を有しているものであり(中略)、そこに込められた切実な思いには、平和憲法下の日本国民として共感すべき部分が多く含まれているということができ、決して、間接民主制下における政治的敗者の個人的な憤慨、不快感または挫折感などにすぎないなどと評価されるべきものではない。」という、わかりやすく人間味のある言葉に心打たれました。

その後、スタッフ2人で行った10月1日渋谷区勤労会館の「名古屋高裁判決を活かす東京集会」も心に残るものでした。

名古屋高裁訴訟の会代表の方が名古屋から国会に4万6326筆の署名を提出するために上京された報告会でしたが、訴訟を起こした時から4年以上使ってきたという色鮮やかな手書きの横断幕を背に、川口弁護士が「私たちが今後この判決をどう活かして行動していくかが問われているのです」と力強く語られていた姿が忘れられません。

そのほかにも、憲法違反の税金のしくみ、防衛疑獄、辺野古基地反対の集会、裁判員

制度反対の集会など、様々な分野の集会で少しずつ勉強をしてきました。

その傍ら、講演会が始まる前の会場で意見広告のチラシを撒いたのですが、その中で平和運動をされている色々な方々と心が繋がっていく喜びを何度か味わいました。

一つは、9月、日比谷公会堂で行なわれた「あの戦場体験を語り継ぐ集い」で、スタッフ2人がチラシ配りをした時の思い出です。その時はまだ、新しいチラシが刷り上っていませんでしたので、第7期の意見広告掲載新聞の別刷りを配っていました。杖を支えにやつのことで会場に辿りついたといった感じの高齢の元兵士の方は私たちの差し出す新聞の別刷り「武力で平和はつくれない」の青い大見出しをじっと見つめられて、うなずきながら不自由そうな手で受け取って下さいました。そして、「私は、レイテ島で本当に大変な目にあって・・・」と話し出されたのです。この時は、命ある限り、戦争の悲惨さ、無意味さを語り残していかなければという元兵士の方の気迫が胸に迫りました。

もう一つは、11月1日「防衛疑獄を追いかけて」という軍需利権についての迫真のレポートを聞きに行つて、新しいチラシを配布した時のことです。憲法をともに読めば全く必要のない戦車や迫撃砲弾、ミサイルなどを毎年アメリカから購入している防衛省。それも水増し請求そのままの膨大な税金の無駄遣いリストを見て参加者一同、溜息をつい



ていた時です。

1人の参加者の方が、「意見広告」の小チラシを高く掲げて「今まで、軍事費と社会保障費について国会の場でもどこでも別々に論じられてきたが、どうして組み合わせる問題にしないのかと思っていました。そこに今日はこんないいチラシが配られました。」と言いながら、会場の皆さんに見せて下さいました。「人の暮らしに銃はいらない」「人の暮らしに地雷はいらない」と書かれた大塚昭夫さんの九条・平和詩と「軍事予算は4兆8千億円を超えるのに、社会保障費はここ5年、毎年2200億円削減です。」の言葉が会場の皆さんに示されたのです。皆で何度も議論しながら文案を練ったチラシを、集会で配布した苦労が実った気がしてとても嬉しかったです。

(佐藤光子)

## ・「ブログが伝えるもの」

2007年、08年の5月3日は、日比谷の憲法集会に参加し、新聞掲載の意見広告別刷りを配りました。別刷りを配っていると、「賛同しているよ」「どこの新聞なの?」「今年、色が付いて良かった」「これ全部名前なの?どうしたら載せてもらえる?」「名前を出しているけど、小さくて見えないよ」と様々な反応が返ってきます。一人ひとりの小さな力を集めると、新聞の一面に意見広告として掲載できる力になると実感する5月3日です。

8期、スタッフの一員として加わり、これまでに、集会・学習会に参加しています。正直、参加・交通費の連続出費は、負担になりますが、内容の深さで会が終了すると参加して良かったと思います。集会等では、必ずと言ってよいほど、8期のチラシを配り賛同を呼びかけています。

実務会議で集会等において、学習したことを、お知らせしたいという声上がり、7期まで使用していたホームページ上のブログを活用することになりました。ブログのカテゴリーを増やして、『イベント情報』『いつてきました』『事務局風景とスタッフの声』の3種類を作り、『イベント情報』には集会等の案内を、『いつてきました』には、参加した集会の写真と報告記事を掲載するようにしました。

「文章は苦手・・・」と言っても、書かねばなりません。報告だけの短い文章でも、いかに読みやすく伝えるかというのを考えるようになり集会等で、しつかりメモを取るようになりました。合わせて写真も撮ってくるようになりました。また事前に、チラシ配りの許可を得ることや会場内にチラシを置かせてもらえるよう依頼することも忘れないようになりました。

『事務局風景・スタッフの声』では、チラシの発送作業や入力に來ていただいたボランティアさんのことや、会議の様子・Tシャツなどのことを載せることで、事務局が何を行

なっているのかを、お知らせするようにしました。ときおり事務所内の写真も載せています。

ブログ担当は2人ですが、その1人として様々な角度から意見広告運動を理解していただき、より多くの方々から賛同を得られるようなブログ作りを心がけています。そして全国の方々と情報を共有して、改憲阻止の草の根ネットワークがさらに広がり大きなうねりとなつて、5月3日の新聞紙面に『非武装・不戦の憲法を変えさせない』意見広告を出す力として結集できれば良いと思っています。ホームページと合わせてご覧になってください。

(田中みゆき)

## 「九条シール」が新しくなります!

おなじみの青と赤の「九条実現シール」の在庫がすっかりなくなったので、鈴木一誌さんにお願ひして新たな九条シールを作成していただくことになりました。賛同者の皆様からのご希望で、小さいシールだけのものも作ります。詳細は出来次第、ホームページで紹介いたしますのでご期待ください。



# 【田母神事態】超憲法的重武装集団としての自衛隊

井上 澄夫

## 問題のとらえ方について

昨年4月17日にイラク派兵差止訴訟で名古屋高裁が下し確定した違憲判決（イラクでの航空自衛隊の活動は憲法9条1項違反）について、自衛隊制服組（軍人）のトップである田母神俊雄航空幕僚長（当時）が「そんなの関係ねえ」とうそぶいたとき、私たちはもつと真摯にことの重大さを受け止めるべきだったのではないだろうか。栗栖弘臣三元統合幕僚会議議長は1978年、「奇襲侵略を受けた場合、第一線部隊指揮官が超法規的行動に出ることはありえる」という超法規発言によって金丸信防衛長官（当時）に解任された。田母神空幕長の「そんなの関係ねえ」発言はそれと同質の軍による憲法蹂躪という問題をはらんでいたにもかかわらず、彼は解任されなかった。当時の福田首相は責任を問わず石破防衛相はむしろ発言を擁護し、世論の反発も弱かった（それ自体が大問題なのだが）。

本稿のタイトルで私は「田母神事態」という表現を用いている。問題とか事件ではなくあえて「事態」としたのは、田母神論文に発する事態が浜田防衛相による更迭（単なるクビのすげ替え）で終わるところか、田母

神氏がそれまでにやってきた危険な動きが次々に明らかになっていくからである。「田母神事態」は現在の自衛隊が日本国憲法の外に存在しているという危機的状況を表わしている。ここでこの「事態」を正確にとらえ、それに対応しないと、とんでもないことになる。そういう思いで本稿を記したい。

## 「事態」の発端と展開

田母神空幕長は昨年10月、ホテルチェー・ン・パグループ主催の「真の近現代史観」懸賞論文に航空幕僚長・空将として応募して懸賞金300万円の最優秀賞を受賞した。論文「日本は侵略国家であったのか」の内容は広く報道されたが、ここでは一部をできるだけ簡潔に要約して抄出したい。

◆日本は朝鮮半島や中国大陸に軍を進めたが相手国の了承を得ないで一方的に軍を進めたことはない。蒋介石はコミンテルンに動かされていた。コミンテルンの目的は日本軍と国民党を戦わせ、両者を疲弊させ、最終的に毛沢東共産党に中国大陸を支配させることであつた。我が国は蒋介石により日中戦争に引きずり込まれた被害者なのである。

◆我が国は満州も朝鮮半島も台湾も日本本土と同じように開発しようとした。我が

国は他国との比較で言えば極めて穏健な植民地統治をした。日本政府と日本軍の努力によって、現地の人々はそれまでの圧政から解放され、生活水準も格段に向上した。日本は第2次大戦前から5族共和を唱え、大和、朝鮮、漢、満州、蒙古の各民族が入り交じって仲良く暮らすことを夢に描いていた。人種差別が当然と考えられていた当時にあって画期的なことである。

◆米国もコミンテルンに動かされていた。ルーズベルト政権内のコミンテルンのスパイが大統領を動かし、日本はルーズベルトの仕掛けた罠にはまり、真珠湾攻撃を決行することになった。

◆東京裁判のマインドコントロールは今も日本人を惑わせている。日本の軍は強くなると必ず暴走し他国を侵略する、だから自衛隊は出来るだけ動きにくいようにしておこうという。自衛隊は領域の警備もできない、集団的自衛権も行使出来ない、武器の使用も極めて制約が多い、攻撃的武器の保有も禁止されている。自衛隊はがんじがらめで身動きできないようになっていく。このマインドコントロールから解放されない限り我が国を自らの力で守る体制がいつになっても完成しない。

◆タイ、ビルマ、インド、シンガポール、インドネシアで、大東亜戦争を戦った日本の評価は高いのだ。我が国が侵略国家だったなどというのは正に濡れ衣である。私た

ちは輝かしい日本の歴史を取り戻さなければならぬ。

残念だが、これらの言説を批判する紙幅はない（昨年11月11日付『朝日』の「検証・田母神前空幕長論文」がとりあえず参考になる）。

この論文によって田母神空幕長は更迭されたのだが、その後、彼が一昨年空幕長に就任したあと、空自の隊内誌『鵬友』に先の論文と同趣旨の文章を寄せていたことが発覚したにもかかわらず、防衛省はいささい処分を行わず定年退職としたため、彼は7000万円の退職金を手にすることになった。浜田防衛相が辞表の提出を求めたが、田母神氏は拒否し「私の考えは理解されている」として元首相2人の名を挙げたと報道されている（その一人は森喜朗元首相）。それだけではない。田母神氏と同じ懸賞論文に航空自衛官78人が応募していたことが明らかにになった（12月25日付防衛省最終調査では97名）。応募を全国の隊員に呼びかけたのは航空幕僚監部教育課で、航空幕僚監部に懸賞論文を紹介したのは田母神氏自身である。応募した航空自衛官のうち実に62人もが、かつて田母神氏が指令だった空自小松基地（石川県）第6航空団の隊員で、同航空団トップの司令名の指示で同じテーマ「真の近現代史観」で論文を書かせ投稿させていた。しかも、同航空団は幹部隊員に論文指導していたのである。

論文を募集したアパグループの元谷外志

雄代表は「小松基地金沢友の会」の会長であるが、同会は99年、当時小松基地のトップの司令だった田母神氏の直接の要請で結成されたことを同会事務局長が証言している。自分が作らせた「友の会」の会長が代表のアパグループの懸賞論文に応募して入賞したのである。

### 田母神式超憲法的隊員指導

田母神氏は小松基地第6航空団司令のあと空幕装備部長を経て統幕学校校長になった。その際は、まったく異例のことに、「日本の歴史と伝統への理解を深めさせる」として幹部高級課程に「歴史観・国家観」の講義を新設した。講師はジャーナリストの櫻井よし子氏、作家の井沢元彦氏、福地惇大正大学教授（新しい歴史教科書をつくる会副会長）などで田母神論文の趣旨に近い人々をそろえた。彼は自分のイデオロギーを隊員に吹き込もうとしたのである。

昨年1月30日、彼が空自熊谷基地で行なった講話「我が愛すべき祖国日本」は懸賞論文の雛型であるが、そこで彼は「南京大虐殺は見た人が一人もない」などの歴史観を披露しつつ、機密保護法制定の必要、専守防衛の見直し、他者の意見を借りての核武装必要論をぶちあげ、隊員たちに『産経新聞』・月刊『正論』・『諸君』・『Voice』（PHP研究所）を読むことを薦めている。

憲法99条（公務員の憲法尊重擁護義務）な

どまったく念頭がない人物が航空自衛隊運用の権限を握っていたのである。自衛隊内には彼の論文を支持する隊員が少なくない。沈黙しているが同様の幹部自衛官もいると伝えられる。

「田母神事態」は現在の自衛隊がいかに超憲法的存在になっているかを、醜態に暴露したのだ。この事態を放置すれば、この重武装集団が場合によっては政治介入に打って出る危険は増大する。まさか2・26事件の再現なんて、クーデターなんてなどとは思わない方がいい。そうなる土壌を私たちは取り去っていない。防衛省が昨年末まとめた省改革の「基本的考え方」では「自衛隊運用の所掌事務を内局（背広組）の運用企画局から、制服組主体の統合幕僚監部に移管。統幕の副長級に背広組を充てるが、内局の役割は大幅に縮小される」（08年12月10付「共同通信」）。防衛省・自衛隊は戦前の軍部に近づきつつあるのだ。

今回の「事態」について、政府首脳もマスメディアも「文民統制」（シビリアンコントロール）の強化の必要を語る。しかし戦力不保持を掲げた現憲法で「文民統制」にかかわる条文は66条2項の国務大臣文民規定だけであり、それ以外に「文民統制」の明示的な制度規定はない。そこを踏まえて自衛隊という重武装集団をどうするかが根本的に問われている。

（いのうえ・すみお、本誌編集委員）





## 『戦争サービス業』

### 戦争の実態が一変してしまった

高橋 武智

戦争の起源は人類の歴史とともに古く、雇われて戦う「傭兵」の起源も同様だ。現代、とくに冷戦終結後の1990年代以降、諸大国の軍隊の規模や予算は確かに縮小したが、それを補完するかのようになり、広い意味の傭兵、つまり軍隊と契約関係をもつ民間団体の活動が飛躍的に拡大した。英語では「民間軍事会社」の名前で一括されるが――

最も有名なものはイラクで民間人の殺害にかかわったブラックウォーター社だろう――、その実態は、戦争請負業、あるいは戦争代行業と呼ぶのがふさわしい。だから請け負うのかといえば、いうまでもなく国家からだ。これら企業の役割が現在いかに急速に大きくなりつつあるか、つまりこれら企業こそ、今日の戦争、控えめにいつ

て「武力紛争」を世界中で生産・再生産している実情を本書は精密に描き出している。対イラク開戦時の米国防長官・ラムズフェルドは、「軍事の中核部分は民間に委託することが可能だ」と語った。ブッシュとともに、やっと政権をしりぞく副大統領チェイニーは、この種の戦争請負会社でも補給関連の大手、ハリバートン社の社長だった。ときどきテレビで見るアフガニス

タン大統領カルザイを取り巻く護衛たちも、全員が軍事会社の職員だ。イラクのアブグレイブ収容所で、拷問を指揮した悪名高い米人は、国務省の名簿上は「通訳」扱いだった、などなど。

これらの会社が遂行する「事業」は実に多様かつ広汎だ。普通「死の商人」の仕事とされる武器の生産・供与に始まり、場合によっては基地の建設、重要人物の警護や施設の警備、要員（兵士のこと）の募集・養成・訓練から、普通スパイ活動と呼ばれる諜報・情報収集活動、さらには、後方からの補給・兵站までもが含まれる。つまり、戦争行為と呼ばれるもの一切だ。（警護を受ける人物には、赤十字を除き、著名な人道支援団体の活動家もふくまれるという。）

これらの会社は、国家と（しかも、かつての「軍産複合体」のように一國規模とかぎらず、複数の国家とも）商法上の契約を結び、国庫から莫大な委託金をせしめつつ、企業秘密の名のもとにその活動実態を秘匿している。戦争は国家の専権事項とされてきたが、近代以降、戦争を制限するための努力が積み重ねられ、二度の大戦を経て、国家の恣意的な戦争行為を防ぐよう国際法はそれな

りに整備された。国連が曲がりなりにも機能しているのには、こうした背景がある。しかし、2003年春、イラク戦争開戦直前の激しい国際世論の反対と、地球を何周もするような反戦デモの高まりをもってしても、人類は起ころうとする戦争を阻止することはできなかった。

そこへ、この戦争の「民営化」だ。ここにネオリベリズムの現れを見ることには十分以上の根拠がある。戦争を国家の手から切り離し、あくなき利潤追求をめざす企業の手に移すとは、この数世紀間の努力を水泡に帰せしめる暴挙であり、万人が万人にとって敵である原始状態に人類を戻すものであろう。

私たち「市民の意見30の会」の存在理由は、「いつであれ、どこであれ、殺すな！」と国家にたいし要求するところにあつた。今それでは明らかに不十分になった。いかにして私たちには、この戦争の変容に対応し、新しい状況のもとで、戦争の廃絶と平和の構築に向かって進めるのだろうか？ 根本的な問題を突きつけられている。

これは単なる杞憂ではない。90年代は旧ユーゴをめぐる民族紛争が吹き荒れた。そこにはいくつもの国軍とともに、数々の民間軍事会社が潜り込み、問題解決を困難にすると同時に、自分たちの活動空間を広げた。メディアは、大きな戦争のことしか報道しないが、アフリカのたとえばソマリア



では、部族間の争いにまで、これら企業は介入して、ただでさえ複雑な紛争を拡大している。とくに、委託金を国家から巻き上げるにとどまらず、そこに産する貴重な鉱物資源の支配権を奪うことでさらに大きな利潤をあげようとしている。

この瞬間、私たちが目を離せないでいるイスラエルは、ついシオニズムという名の「ナショナリズム」国家と思いがちだが、イスラエルもまた、民間軍事会社とのつながりが強く、とくにアフリカでの活動が顕著であるようだ。本書の著者はドイツ人専門家であり、すべて十分な典拠と具体例をあげて分析している。詳しくは直接当たっていただくほかないが、一読して最も重要な点だけをここに指摘した。

(たかはし・たけとも、本誌編集委員)  
(とりあげた本：ロルフ・ユッセル著  
下村由一訳『戦争サービス業——民間軍事会社が民主主義を蝕む』 日本経済評論社 2800円＋税)

## 2月緊急学習会

### 「ガザ侵攻—イスラエルはなぜガザを攻撃したのか—」のお知らせ

ガザってどんなところ？ イスラエルはなぜ攻撃したの？ なぜパレスチナは60年間も占領されているの？ なぜ中東は戦争が終わらないの？ ガザの攻撃をとめるにはどうしたらいいの？

2月の読者懇談会は、2004年に起きたラファの攻撃（レインボー作戦とイスラエルは名づけた）を題材にしたパレスチナのドキュメンタリー映画「レインボー」を上映して、そのあとパレスチナ問題に詳しい早尾貴紀さんに今回のガザ侵攻の背景についてお話をさせていただきます。

第1部 「レインボー Rainbow」（パレスチナ／41分／2004年）

監督 アブドゥッサラーム・シヤハダ

第2部 早尾貴紀さんのお話

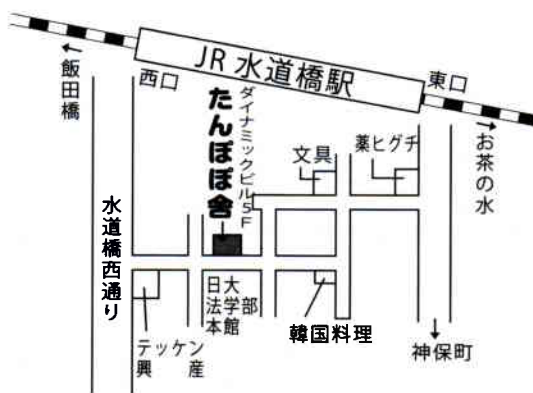
・日時 2月5日（木）

午後6時半から8時半まで

・参加費 500円

・会場 たんぽぽ舎

（JR水道橋駅分5分ダイナミックビル5F）  
03・3238・9035





## 境界線を越える人々を描く

「シリアの花嫁」



■エラン・リクリス監督作品 ■脚本 スハ・アラフ／エラン・リクリス ■2004年モントリオール世界映画祭グランプリ ■イスラエル・フランス・ドイツ／劇映画 97分 ■主演 ヒアム・アッバス／マクラム・J・フリー／クララ・フリー ■配給 シグロ／ビターズ・エンド ■2月21日より岩波ホール（東京・神保町）をはじめ全国で順次公開

▼ゴラン高原は、1967年の第3次中東戦争以来イスラエルに占領され、その後の和平交渉でシリアが返還を要求している地域。シリアとの間に軍事境界線が設定され、

UNDOF（国連停戦監視軍）が駐留している。約4万人の住民はイスラム教ドゥルーズ派とイスラエル入植者が半々だが、イスラム教徒の多くは無国籍の状態にある。

▼停戦ラインによってシリアから隔てられたマジュダルシャムス村の住民は、谷向この丘に立つ肉親や友人と、拡声器を使って会話をかわす。村と丘の間は地雷原で、近づけない。実在する「叫びの丘」は、作品の中で効果的に使われている。

▼花嫁モナが、写真によるお見合いでシリアに住む従兄弟のもとに嫁ぐ日。国交のないシリアに嫁ぐ女性には、生家に戻ることができなくなる。姉のアマルは不安を訴える妹を励まし、まめまめしく準備を手伝う。

2人の兄も外国から帰り、シリアの大学にいる末弟を除いて、一家は久しぶりに顔を合わせる。だが父親は、村の長老の反対を押し切ってロシア人女医と結婚した長男を許さず、口をきこうとしない。

▼家族が抱えるさまざまな問題が表出する中、前祝いの食事会も終り、一同は車を連ねて停戦ラインに向かう。シリア側には、花婿たちがバスで乗りつけて待っている。特別に派遣されたイスラエルの係官が、花嫁の通行証に出国印を押す。規定に従い、国際赤十字の職員がシリア側に行き、入国印をもらおうとするが、拒否される。「ゴラン高原はシリア領だ。シリア内を移動するのに出国とは何だ」。職員は戻り、イス

ラエル側に善処を求めるが、「これが規則だ」とにべもない。何時間も待たされた挙句、ようやく修正液で出国印を消させることに成功した。今度こそうまく行くと一同躍り上って喜ぶ。だが、シリア側の係官が交代していた。新しい担当者は、消された出国印を怪しみ、入国を拒否する。その時、モナはたった一人で、シリア側に向かって歩き出す。

▼監督のエラン・リクリスはユダヤ系、脚本のスハ・アラフは（主演のフリー父娘も）パレスチナ系のイスラエル人だという。芸術の世界では両民族の共同作業が実現しているようだ。政治的に微妙な主題を扱っているにもかかわらず、作者の目はあくまで冷静で、均衡を保っている。政治の境界線上に暮らす人びとが、故郷や家族に深い愛情を抱きながらも境界線を越えて国際的に生きざるを得ないことが、ごく自然に理解できる。登場人物は、イスラエルの警察官や役人、シリアの入国管理官に至るまでていねいに描かれ、問題がこじれるのは彼らのせいではなく、彼ら自身現在の不合理で不自然な状況にうんざりしていることが示されている。この作品は、イスラエルという人工的軍事国家の脆弱さを感じさせると共に、私たちに、理不尽な暴力による占領がいつまでも続いてよい筈がないという気持ちを抱かせる。

本野義雄（もとの・よしお、本誌編集委員）

# ふしぎの国のあかり (17) by きたたこ



2008. 11. 15. 1PM\*

## Information

### ◎連続講座

「私」と戦後日本の社会運動・第3章 ◆2月14日(土)第5回・「日本人」を問う—在日との連帯運動 発言者: 徐翠珍/木元茂夫 ◆3月7日(土)第6回・暮らしの中から社会を変える—「生活者」の運動 発言者: 郡司真弓/向田映子 2回とも 14:00~17:00 場所: ピーブルズ・プラン研究所 (電話/FAX: 03・5273・8362、E-mail: ppsg@jca.apc.org) 参加費: 会員1000円、非会員1200円、貧乏人(自己申告制)800円

### ◎写真展

☆2月16日(月)~22日(日)山本英夫写真展『沖縄・辺野古“この海と生きる”』11:00~19:00(最終日は17:00まで) 場所: PAO(パオ)ギャラリー・2F(JR総武線/都営地下鉄大江戸線・東中野駅下車2分、03・3361・2218)、問い合わせ・予約先: 山本英夫(電話/FAX: 03・5996・0779)

### ◎2009年総会・記念講演

☆2月21日(土)沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック2009年次総会・記念講演 池宮城紀夫(辺野古新基地反対弁護団・団長)『沖縄基地に関する諸問題』19:30開会 場所: 中野区勤労福祉会館・3階大会議室(総武線・中央線・東西線「中野」駅南口から徒歩5分、電話: 03・3380・6946) 会場費: 500円 主催: 沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック(電話: 090・3910・4140)

☆2月28日(土)つながる歌 つながる舞 つながるいのち—戦争と女性人権博物館建設のためのチャリティーコンサート東京— 開場17:00 開演18:00 出演: 趙寿玉(ちょう・すおく)、サルプリ舞・その他) 李政美(い・じょんみ、歌) 安聖民(あん・そんみん、パンソリ) 会場: 東京一ツ橋ホール(日本教育会館3F) 入場料・一般: 3500円(当日: 4000円) 小・中・高校生: 2000円(当日: 2500円) 主催: つながるコンサート東京実行委員会 ※予約・問い合わせ=電話: 070・6524・6090 FAX: 03・3991・3139 E-mail: tsunagaru.tokyo@gmail.com

☆3月7日(土)【映画と講演の集い】『アメリカ ばんざい—crazy as usual—』上映: 13:30~ 会場: 東京ウィメンズプラザ・ホール(電話: 03・5467・2377) 上映後、藤本幸久監督の講演 参加費: 前売り1000円(当日1200円) 共催: 市民意見広告運動(第8期)/市民の意見30の会・東京(電話/FAX: 03・3423・0266、03・3423・0185)

☆1月24日(土)~3月15日(日)写真展「悠々として急げ—開高健と昭和—」講演会: 第1回・2月15日(日)坂本忠雄「編集者から見た作家・開高健」第2回・2月22日(日)葉千栄「開高健の見た・感じた中国」第3回・3月1日(日)菊谷

匡祐「開高さんとの出会い—人間・開高健—」※各回とも14:00~16:00の予定、場所: 写真展は杉並区立郷土博物館2階廊下ギャラリー(観覧料100円)、講演は同博物館視聴覚室(参加費無料、観覧料100円のみ、定員: 毎回先着60名) ■杉並区立郷土博物館(休館日: 毎週月曜日・毎月第3木曜日、開館時間9:00~17:00、電話: 03・3317・0841、FAX: 03・3317・1493)

☆3月7日(土)5年闘ありがとう!—立川反戦ビラ弾圧・最後の集いと打ち上げ— 13:15開場 13:30開会 講演: 石崎 学「司法の、法からの、逸脱?」/寺中 誠「国際人権規約と反戦ビラ弾圧」ほか 場所: 三多摩労働会館(JR立川駅北口5分、電話: 042・524・2594) 主催: 立川反戦ビラ弾圧救援会(電話: 042・525・9036) ※集会後、中華料理店で打ち上げ



## 戦争の思い出

田中 翠



私は昭和2（1927）年生まれで現在82歳です。私が小学校に入学した時、国語の教科書はサイタサイタサクラガサイタに始まり、次はススメススメヘイタイススメでした。4年生になった時、中国で「支那事変」が起りました。学校でも戦地の兵隊さんを思っている丸弁当といって梅干一つのおかずを持って行きました。学校では勇ましい軍歌を歌ったり、4年生ぐらいから授業の前に124代の天皇の名前を皆で暗唱するのです。万世一系の天皇は神だと信じていました。

街には出征兵士の奥さんが千人針を持って立って居ます。一人ひとりが武運長久を祈りつつ赤い糸で玉止めをするのです。家族は必死の思いだったでしょう。遂に昭和16（1941）年12月8日、日本はイギリス、アメリカに宣戦布告しました。

## ●奉安殿、ゲートル、もんぺ

私の女学校はイギリスの聖公会のミッションスクールで毎朝礼拝があり、校長先生の聖書のお話があり讃美歌を唱って教室に入ります。それがあつという間になくなり、イギリス人とアメリカ人の英語の先生は本国へ追放され、英語の授業も少なくなりました。

敵性語は不要というのです。校内にあったグリーンンの小さな教会の三角の塔がある朝倒れていました。そして運動場の真中に奉安殿という天皇、皇后の写真飾った建物が出来たのです。毎月大詔奉戴日（8日）には、全校生徒が護国神社に戦勝を願って参拝しました。近所の農家に手伝いに行ったり、体操の時間に防空演習をしたりしました。その頃日本の男性は足にゲートルを巻き、戦闘帽をかぶっていました。女学生も制服の上からもんぺをはいて登校しました。

やがてアメリカの軍事力に日本は押され、ミッドウェー海戦で敗れてからだんだんと占領地をアメリカに奪われました。私たちは学徒動員令によって、3年以上が軍需工場で働くことになりました。それは尼崎にあったプロペラ工場です。女子でもお国に役立つことが嬉しくて、張り切って朝8時から5時までプロペラの軸につける遊星歯車を作りました。小さな旋盤に向かって立ちづめの作業も平気でした。男子中学生も私たちも、神風鉢巻をして働きました。

## ●空襲、そして敗戦

そのうち、アメリカの空襲が始まりました。

昭和20（1945）年6月15日、爆撃機が30分で工場を完全に破壊したのです。私は友人たちと共に焼夷弾の下を逃げ回りました。目の前で灰になって行く工場を空しく見つめていました。

大都市は大方破壊され、神戸の友人も家を失い田舎へ疎開して、工場に來なくなりました。食べる物がなく、母は汽車に乗って買出しに行きました。毎晩の空襲でゆっくり眠れません。それでも、日本が負けるなんて考えませんでした。

8月6日広島に、9日長崎に原子爆弾が落され、ついに8月15日、日本はポツダム宣言を受諾、無条件降伏をしました。

病気で除隊になった兄と共に一家揃って天皇の放送を聞き、私は死んだ人びとが無駄死にだったことが悲しく泣きました。夕方、兄の親友が来て、兄と抱き合って号泣していました。その人は、3人のお兄さんが戦死されていたのです。

戦後、色々の本を読みました。戦争が終って辛かったのは、中国との戦争が侵略戦争だったこと、政府が国民を騙していたことです。大阪駅前にはたくさんの戦災孤児が飢えて、裸足でさまよっていました。焼け野原の街を肩を落して歩く大人たち、アメリカ兵にむらがる女たち、チューインガムをもらう子どもたち―戦争の空しさが心に残りました。

（たなか・みどり、大阪府伊丹市在住）



# 読者のおぼろけ

## ◆戦争のない世の中を夢見て

大阪府貝塚市 西川治郎  
私ごとですが、99歳です。

戦争のない世の中を夢に生きています。御会の働きに感謝して。

## ◆戦争のない世界を

群馬県前橋市 梅山ミト子  
送金は、戦争のない世界をのぞむ私の素朴な思いです。

## ◆表紙の絵が楽しみです

東京都世田谷区 本田都南夫  
毎号、表紙の絵を楽しんでいます。

## ◆貴誌のおかげで、広い立場から見られるように

東京都豊島区 長島花樹  
いろいろ情報を与えて頂いて有難うございます。オバマ氏についても見通しを書いて下さって、どうなることかと不安でしたが……、広い立場から見られるようになりました。

## ◆ダグラス・ラミスさんの文章、なるほど！

愛知県知立市 鈴木 磐  
ダグラス・ラミスさんの「米オバマ新政権をどう見るか」、興味深く読みました。なるほど！

※ラミスさんの論文に感謝するメッセージがほかにも届いています。編集部

## ◆軍部の独走が進行しています

石川県金沢市 井澤幸治  
私にとって、今年の10大ニュースのトップは、田母神事件です。文民統制は底が抜けていて、田母神の一方的な発言に終始。まことに暗澹たるひと幕でした。恐慌の中で軍部独走が着実に進行しています。

## ◆平和と生存権は密接に結び付いている

京都府京都市 大井哲郎  
軍事優先の国においては、まず生存権の保障が犠牲になります。平和と生存権は密接に結び付いていると思います。

## ◆日本も是非、非武装の国に

東京都中野区 粉川素子  
111号で世界に非武装の国が27カ国もあると知り、うれしくなりました。日本も是非、そうなりたいです。

## ◆前号の「私の戦争体験」にがっかり

京都府京都市 加藤敦美  
歴戦の勇士の武勇談（前号の「私の戦争体験」を『市民の意見』に見ようとは思いませんでした。何考えとるんですか、がっかりです。追い詰められると、日本は自殺をやる。かつては対米自殺戦争、今度は対中自殺戦争、田母神論文、クーデター？……そうさせてはならない。

## ◆金や力に負けないように、しっかり世を見定めて

千葉県市川市 塩川希代子・柳下繁一  
これだけ無能無知な首相をいたさながら、暴動やデモが起きない不思議な国。でも、平和憲法を持つ日本。しっかり世を見定めて、金や力に負けないようにしたいものです。

## ◆私たちがしっかりせねば

愛媛県松山市 窪田泰子  
小田実さん、筑紫哲也さんが去り、今また加藤周一さんを失い、心細い限りです。でも、私たち一人一人がしっかりせねば……。

## ◆市民の声と力の結集を

北海道函館市 俵 浩治  
歴史から《何事も学ばず、何事も忘れない》勢力に怒りを覚えます。名もない市民の声と力の結集を願っています。



## 事務局便り

吉川 勇一

◆パレスチナ自治区ガザへのイスラエルの攻撃で、1月14日までにパレスチナ側の死者は930人、負傷者は4千数百人を数え、死者の4分の1は子どもだと言われています。世界の各地では、イスラエルに対する抗議デモが展開されていますが、東京や大阪などでも、イスラエルの大使館などへの抗議の意思表示行動が行なわれています。1月10日の行動には、市民の意見30の会・

東京と市民意見広告運動の事務局からも何人かが参加しました。また、2月に行なわれる「読者懇談会」も、当初の予定を変更し、ガザ問題の学習会にすることが決まりました。多くの読者の方のご参加を期待します（29ページのお知らせをご覧ください。）

◆また、これまで何回もお知らせをしてきた長野県の「無言館」見学ツアーは、詳細が決まり、本誌に案内のチラシと申込用紙が同封されています。館主の窪島誠一郎さんからは、「無言館第二展示館（傷ついた帆布のドーム）および「オリウツの読書館」は昨年9月20日に開館いたしました。ご来館をお待ちいたしております」という賀状をいただきました。本号掲載の吉岡セイさん（本誌のカットの作者）の文もご覧ください。

参加したいという申し込みもすでに何人もの方からいただいています。満員になる前に、お早くお申し込みください。

◆年末の編集委員会や事務局会議では、本誌編集上のルールについてかなり時間を取って議論が行なわれました。本誌への原稿について、編集の都合上や担当編集者の希望で文章の手直しをする際のルールです。原文を出来る限り尊重することは大前提ですが、やむを得ず手直しや要約、部分削除などが必要となった場合は、必ず事前に筆者に連絡し了承を求めることが再確認されました。まことに当然のことですが、あらためてご報告しておきます。

◆ここところ紙面に余裕がなく、ご案内が途切れていますが、反戦のグッズとして、会のシンボルマーク「殺すな」（表紙のマーク参照）をデザインした大（直径55ミリ、250円）、小（同31ミリ、220円）のカラーバッジや、大中小の丸いマークを切り取れるようにした光沢紙のカラーシール（1セット5枚で300円、それぞれ送料別）などが継続販売されています。10組以上のお申し込みには割引もあります。また市民意見広告運動の事務局では、ave peace a chanceという文字の入った反戦Tシャツ（色は3色、サイズはLMS、いずれも1300円）を作りましたが、好評で、在庫は少なくなっています。また、「九条実現」のシール2種は在庫がなくなりましたが、鈴木一

誌さんのデザインで新しいシールが2月中に発売予定です。詳しくは同運動のホームページ <http://ikenkoukokujp> を。

◆10ページの「ソニミ事件と『服従の心理』」に出てきているイギリス・ヨークシャーTV放映の「四時間で消された村」を録画したビデオとDVDがあり、往復送料を負担してくだされば、無料でお貸しできます。ソニミ事件にかかわった何人もの元兵士へのインタビューで構成されているドキュメンタリーですが、内容はショッキングで、多くのことを考えさせられます。なお、前号で同じくご案内した「小田実 遺す言葉」のDVDは何人もの方から貸与のお申し込みをいただきましたが、お一人だけメールで申し込まれた方に未発送です。実は、誤ってメールを削除してしまったからです。申し訳ありませんが、送り先をもう一度お知らせ願えません。すぐお送りします。

◆毎度お願いしておりますが、振替などで会費をお送り下さる際、ぜひ通信欄にご意見やご感想をお書きください。事務局や編集スタッフへの何よりの力づけです。

◆本会のメールアドレスは有効ですが、毎日百通以上も来るメールのかんりの部分がいわゆる迷惑メールで、削除の作業が大変です。ご連絡はFAXかはがきのほうが確実なようです。よろしく。

# 無言に向かい無言から再び

— 赤ペンキ事件を考えつつ —

吉岡 せい

昨秋十月二十五日、事務局佐橋さんと共にかねてより懸案であった信濃は上田市にある無言館行が実現しました。長野新幹線、上田電鉄別所線、シャトルバスを乗り継いで、昼過ぎ一気に館のある山王山公園に着。

無言館本館の手前には第二展示館「傷ついた画布のドーム」のまだ新しい建物があり、白い碎石の前庭と「壁」と覚しきミニメントに出会います。見上げると右上部に目を引く赤い塗料のしづきが。「あつ、あのペンキ事件の…」と思ったのですがこれは違っていて「再現」でした。新館見学後さらに少し登るとそこには本館がありました。

れていません。ただ画学生としての試作と生の証を遺す意志の作があるだけでした。秋の良い季節、少なくない老若の見学者も無言に対峙し、また対話しているように感じられました。

一転、密度の高い空間から屋外へ出てほっと一息、樹間の緑の芝の中に何か平らで大きなミニメントが見えます。「記憶のパレット」です。これが赤いペンキをかけられたのでした(2005年)。現在、上面はすっかりきれいにされて、そこには美術学校のある日のアトリエ授業風景と戦没画学生の名前が日中合作の篆刻によって表現・制作されています。古くからありながら新しい篆刻の技術に見とれながらも、この石の大きなパレットの3分の1をべつたりと覆ったという赤いペンキとは何だったのか、考えずにはいられませんでした。

無言の意味するところをさまざま考えつつ、「戦没画学生」の遺物を見ていきます。一人一人若いとはいえずでに画家を歩み始めた人生とその家族あるいは恋人、時代の風景等、そこには戦意を高揚する作品は一枚も展示さ

館主窪島誠一郎氏は当時、賛否の中その赤い一部を残すことを決めたそうです。ここは「戦後60年」の間に私達が喪つてきた「人間風景」について省みることの必要を伝えたかったのです。このミニメントの周囲には信濃デッサン館ほどにはコスモスが根付かない、と氏のエッセイにはあり

ますが、それでも毎年近隣の寺の住職夫人が種を蒔いてくださるのだそうです。「コスモス忌」があるのです。

信濃上田市、ここは私達市民運動に関わる者にとっても大変に意義深い土地柄だと感じ、懇親・交流して英気を養い世界の難局に勇気を持つとうと思いました。

(よしおか・せい、本会会員)

## 無言館ツアーのお誘い

無言館の絵を鑑賞し、会員同士の交流を図るため、次のような催しが企画されましたのでご案内いたします。

日時 2009年6月6日(土)

7日(日)

場所 戦没画学生慰霊美術館「無言館」  
宿泊先 別所温泉上松屋

電話 0268-3812300

費用 13,800円

問合せ先 市民の意見30の会・東京

事務局

電話 03-3423-0185

詳細は同封されたチラシをご覧ください。



# 編集後記

◆昨年12月27日から始まったガザへの攻撃は世界を震撼させた。めずらしくメディアも毎日のように報道したが相変わらずの報道ぶりでテレビに向かい怒っている私である。特に某国営放送が最悪で、まずイスラエルの被害を映し、その後、戦争に巻き込まれ怪我をした市民の声としてパレスチナの人々の様子を映す。これではハマスのロケット砲がパレスチナ、イスラエル双方に被害を出しているように錯覚する。

◆朝、雪をかぶった富士山が白く輝いている。冬の富士ほど美しいものはない。寒ければ寒いほど空気が澄んでいるせいか美しい。夕方、茜色の空に黒い富士のシルエットが浮かぶ。赤と黒のシルエットがまた美しい。富士は関東平野のどこからもちやん

## 市民の意見 30の会・東京 2008年11月～12月会計 (単位:円)

<b>1. 収入</b>	
一般会費	302,500
協力会費	101,500
敬老会費	194,500
障害者会費	5,500
(会費小計)	604,000
カンパ	166,700
ニュース販売	400
バッジ等販売	2,000
集会入場料	5,500
預かり金 (*1)	192,500
立替金精算 (*2)	126,015
収入計	1,097,115
<b>2. 支出</b>	
印刷費 (*3)	261,707
発送費	15,715
通信費	26,929
事務用品費	163,680
消耗品費	2,620
編集費 (*4)	10,391
会場費	4,000
交通費 (*5)	108,440
事務所費	110,000
光熱費	7,474
手数料 (*6)	60,630
雑費	18,421
立替金 (*7)	127,588
預り金精算 (*8)	105,500
支出計	998,578
<b>3. 収支</b>	
前期からの繰越	9,408,608
次期への繰越	9,507,145
残高の内訳	
会基本会計	5,389,409
条約基金	176,715
F/I 基金	2,715,820
預り金	1,225,201
計	9,507,145

と見えるのがまた嬉しい。  
◆こんなに自然は美しいのに、世界は悲惨で、毎日悲しいことばかり起きる。が、気がつけば街路樹の芽がいつの間にか膨らんで春に近いことを告げている。そう。春はもうすぐそこに来ている。春にはこの戦争も終わるかもしれない。そう思いながらパレスチナの人々のために出来ることをしている。

◆出来ることのひとつ。ボイコット。スターバックスには行かない(以前から行かなかったけど)。イスラエルのスニーカーは買わない。

◆編集委員 天野恵一、有馬保彦、井上澄夫、佐橋弥生、杉内蘭子、高橋武智、西田和子、古澤宣慶、細井明美(本号担当、道場親信、本野義雄、諸橋泰樹(次号担当)、吉川勇一、吉田和雄  
◆訂正 前号8頁、下段AWACSの説明を「早期空中哨戒機」と訂正します。

## 会計報告

昨年末より世界的に厳しい経済状況の中で、新しい年が明けました。にも関わらずおかげさまで今期会計はわずかですが、黒字となりました。

また、紙面の関係でここには掲載できませんでしたが、08年度の会計も収支ができたのでご報告いたします。基本会計残高は539万円ほどで、前年より100万円ほどの増加となりました。これは会費だけではなく、常にカンパをお寄せ下さる会員の皆さまのお力添えによるものです。

しかし、このような社会情勢の中で、皆さまの生活もますます厳しさがまし、それとともに今年度の会の財政も決して安閑としていられる状況にはありません。皆さまのご協力をいただきながら、より良いニュース作りをめざしたいと思っております。本年もどうぞよろしくお願い致します。

注 (\*1) 意見広告賛同金の預り金。(\*2) 意見広告事務所費、光熱費立替9～10月分精算。(\*3) ニュース110号の印刷費。(\*4) ニュース原稿、懇談会講師謝礼金など。(\*5) スタッフ交通費補助10～11月分¥76,340、無言館下見出張交通費¥31,760他。(\*6) 会計報告作成手数料9～10月分¥60,000。振込手数料¥630。(\*7) 意見広告事務所費11～12月分¥110,000、その他光熱費等¥17,588。(\*8) 意見広告賛同金預かり分精算。今期の会計には、ニュース111号の印刷費が含まれておりませんので次期の会計に繰り越します。